三田市

屋敷町（やしきまち）遺跡

―― 県営三田大池住宅建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 ――

1999. 3

兵庫県教育委員会

南からの調査地遠景（空中写真）

真上からの調査地全景（空中写真）

例　言

1．本書は、兵庫県三田市屋敷町字大池ノ南588番地他に所在する屋敷町遺跡（やしきまちいせき）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、兵庫県都市住宅部住宅建設課の委託を受け、県営三田大池住宅建設事業に伴って、兵庫県教育委員会が平成６年度（1994）に確認調査・全面調査を実施したものである。発掘調査はマツダ建設株式会社と請負契約を結び実施した。

3．全面調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　山下史朗・松岡千寿が担当した。

4．本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影し、発掘中の空中写真撮影は、㈱日本工事測量、遺物写真については㈱衣川に委託した。

5．本書の執筆・編集は松岡が行った。また、出土須恵器の胎土分析を奈良教育大学教授三辻利一氏に依頼し、玉稿を頂いた。

6．本書に使用した標高の数値は、海抜高（T．P）であり、方位は座標北である。

7．調査で撮影した写真、遺構図、遺物等は兵庫県教育委員会で保管している。

8．本書の作成に当たっては、周辺の調査については、三田市教育委員会　山崎敏昭氏に、中近世の遺物については、兵庫県教育委員会　岡田章一氏に、石器については兵庫県教育委員会　久保弘幸氏に、また、李義明氏、三田市教育委員会からの御援助・御指導・御教示をいただいた。記して謝意を表すものである。

凡　例

1．遺構については、溝をＳＤ、土坑をＳＫ、井戸をＳＥ、柱穴をＰと略称を用いている。

2．遺物実測図の断面図については、須恵器は黒塗り、土師器・瓦は白抜き、瓦器は灰色、陶磁器はトーンをかけている。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　発掘調査の経過 …… 1

１確認調査の概要

２全面調査の概要

第３節　整理作業 …… 3

第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境 …… 4

第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の結果

第１節　遺跡の位置と基本層序 …… 7

第２節　遺構と遺物 …… 9

第４章　屋敷町遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析（三辻利一）… 25

第５章　まとめ

第１節　出土遺物について ……27

第２節　遺構について ……30

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 1

第２図　調査区配置図 …… 2

第３図　周辺の主要遺跡 …… 5

第４図　調査区地区割り図 …… 7

第５図　調査区全体図 …… 8

第６図　土層断面図Ⅰ・Ⅱ …… 9

第７図　ＳＤ断面図・ＳＥ１平面断面図…11

第８図　ＳＤ１～７出土遺物 ……13

第９図　ＳＤ８～11出土遺物 ……15

第10図　ＳＫ平面断面図（１） ……17

第11図　ＳＫ平面断面図（２） ……18

第12図　ＳＫ１～11・柱穴群出土遺物 …20

第13図　包含層出土の石器 ……21

第14図　包含層出土遺物 ……22

第15図　出土瓦 ……23

第16図　屋敷町遺跡出土土器の両分布図…26

第17図　屋敷町遺跡周辺図 ……30

第18図　ＳＤ13と『三田図絵』関係図(模式図) …31

表　目　次

第１表　屋敷町遺跡出土土器の分析データ ……26

写 真 図 版 目 次

カラー図版　南からの調査地遠景（空中写真）
真上からの調査地全景（空中写真）

図版1　南からの調査地遠景（空中写真）
北からの調査地遠景（空中写真）

2　東からの調査地全景
南からの調査地全景

3　A地区全景（北から）
A地区南側（西から）
A地区全景（南から）

4　A地区柱穴群（北から）
A地区井戸とSD1（北から）
A地区井戸断面（南から）

図版5　B地区東側(東から)
B地区西側（北から）
B地区SD8・9(東から)

6　B地区土坑群（東から）
B地区西端（南から）
B地区SD8・13（北東から）
B地区西側（北から）
B地区SD8・9(東から)

7　B地区SD8・13（北から）
C地区土坑群（南から）
D地区全景（南から）

8　A地区北側土層断面（南から）
A地区SD5土層断面（西から）
B地区SD8・9土層断面（西から）

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成２年度に、兵庫県都市住宅部住宅建設課は、老朽化した県営三田大池団地の改築を計画した。

当該地は、旧三田藩の武家屋敷にあたる上、周辺には飛鳥時代の古瓦出土地として知られる金心寺址廃寺があり、近年、隣接地で行われた三田市教育委員会の発掘調査でも遺構や遺物の存在が確認されている。

この計画を受け兵庫県教育委員会ではまず平成６年４月に分布調査を実施した。(遺跡調査番号940033)

分布調査で、遺物を確認したため、これを受けて確認調査を実施したところ、遺構遺物を検出したので全面調査を実施することとなった。

第２節　　発掘調査の経過

１．確認調査の概要

(遺跡調査番号940222)

調査期間

平成６年８月９日・10日・22日

（３日間）

調査面積

102㎡

調査担当者

調査第２班　主査　水口富夫

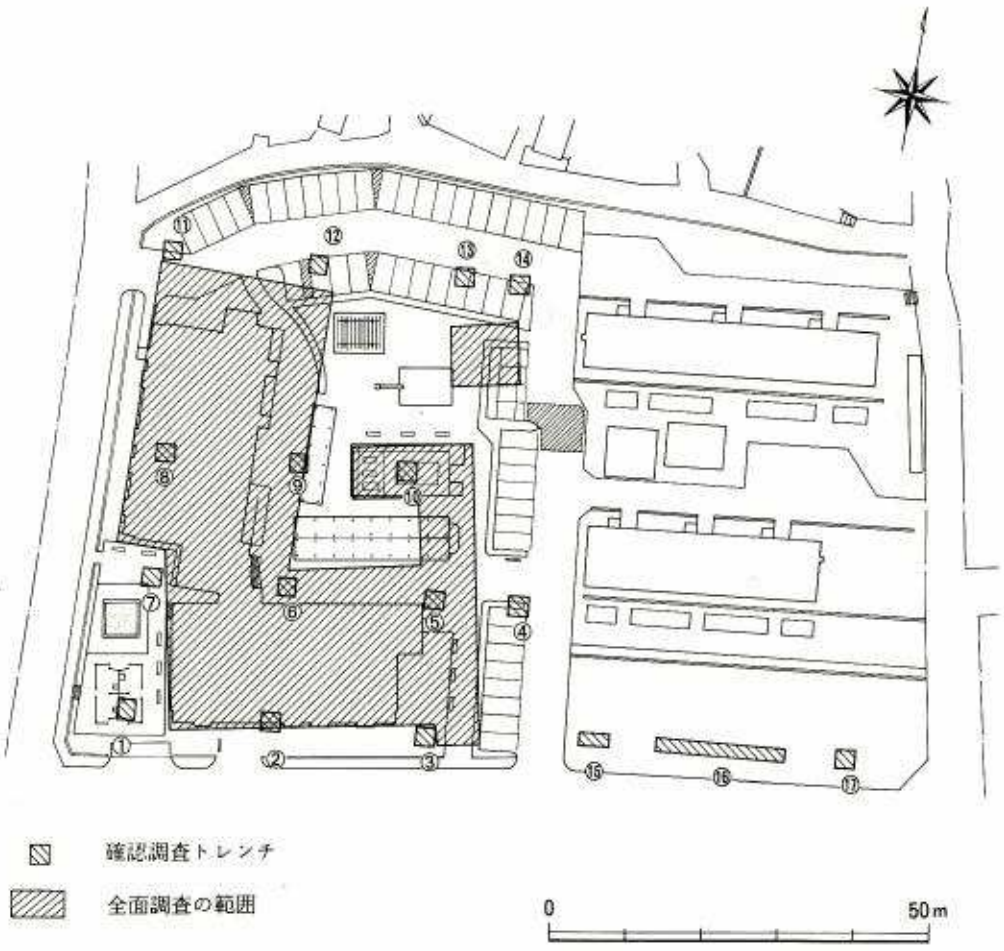
確認調査は、事業対象地を西地区・東地区に分け、西側には14カ所の２ｍ四方のグリッドを設定し、東側では、トレンチを併用して調査を行った。調査は、すべて重機により、一定深度掘削した後、人力掘削によって精査を行った。

第１図　遺跡の位置

西地区

遺構は、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけてのものと、近世末から近代にかけてのものが検出できた。

平安時代の遺構は３・９グリッドでは、土



第2図　調査区配置図

坑群・6グリッドでは溝が検出できた。1・3・6・8・11グリッドで須恵器片が出土した。

近世末から近代の遺構は、主に水田に伴うものであろう。7・8グリッドは水田層に伴う水路と考えられ、南西から南東にかけて溝が流れていたと考えられた。7グリッドでは、最下層で染付の磁器片が多く出土した。

東地区

ここでは、平安時代末期から鎌倉時代初頭の遺構や遺物はなかった。近世の遺構として、16グリッドで溝を検出した。

以上、確認調査の結果から、当該地には、平安末期から鎌倉初頭・近世の遺跡があると考えられた。また、調査地は、近世武家屋敷跡と推定されるため、全面調査が必要であると判断し、同年度に全面調査を実施した。

2．全面調査の概要

（遺跡調査番号940270）

調査期間

平成６年11月14日～平成７年２月６日（50日間）

調査面積

1992㎡

調査担当者

調査第３班　主査　山下史朗・技術職員　松岡千寿

確認調査をうけて、全面調査を実施した。発掘調査は、Ｌ字形に並ぶ二棟の建物と付属する浄化槽等の掘削を伴う範囲を対象とした。

調査にあたっては、約60㎝の盛り土・旧表土を機械で除去した後、人力によって、遺構検出および遺構掘削を行った。掘削後は、ヘリコプターによる空中写真を撮影し、遺構実測図面を作成した。ただし、平成７年１月17日に阪神・淡路大震災が発生し、調査の終盤に行う柱穴等の断ち割り調査が行えなかった。

第３節　整理作業の経過

出土した遺物の整理は、発掘調査時に監督員詰所にて、水洗→ネーミングまで進めた。本格的な整理作業は平成10年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて行った。あわせて、出土須恵器の蛍光Ｘ線分析を奈良教育大学三辻利一氏に依頼した。

平成10年度整理作業

整理担当職員	整理普及班	技術職員	長濱　誠司
	調査第３班	技術職員	松岡　千寿
保存処理担当職員	整理普及班	主　　査	加古千恵子
整理技術嘱託員		主任技術員	八木　和子・宮田　麻子
		企画技術員	小山みゆき・本窪田英子
		図化技術員	石野　照代・茨木恵美子・
			飯田　章子・鈴木まき子・
			横山キクエ・竹内　泰子・
			岸野奈津子・岡田　美穂・
			山口　幸恵・真子ふさ恵・
			宮野　正子
		図化補助員	綾小路公子
		日々雇用	川村　由紀
整理技術嘱託員（保存処理担当）		主任技術員	栗山　美奈

第2章　遺跡を取り巻く環境

第1節　地理的環境

三田盆地は南を六甲山系、北を多紀連山に遮られており、盆地中央を北から南へ流れる武庫川の東西には、神戸層群を基盤とし、大阪層群上部累層から構成される丘陵が広がっている。三田盆地は、北西から南東に伸びる幅約1㎞、延長約6㎞の細長い沖積平地を中心としているが、近年の研究によれば、神戸市との境界をなす丘陵の南に広がる有馬川流域の平地も、歴史的には同一地域として扱うべきだとされている[1]。有馬川流域の平地は、南西から北東に伸びて、現在の行政区画よりやや南で武庫川に接している。

三田盆地南西部には、東西にのびる段丘面が分布し、複数の開析谷によって数条に分断されている。そうした段丘の一つが、屋敷町遺跡の立地する、西山＝屋敷町台地（中位段丘）である。西山＝屋敷町台地は、武庫川と有馬川の合流点から、上流に2キロメートルほど遡った地点に位置しており、今次調査地点の標高は約160m、武庫川の沖積平地との比高差は、約15mを測る。台地上面は、東に向かって下がる緩やかな傾斜をもち、かつての屋敷町遺跡付近からは、盆地北西部から中央部付近までを眺望することができたであろう。

第2節　歴史的環境

屋敷町遺跡はその名称のとおり、三田城に関連する武家屋敷群を中心とする遺跡として知られてきた。今回の調査では近世の遺構・遺物は僅少で、むしろ中世を中心とした遺構・遺物が検出されている。ここで三田盆地の遺跡を時代をおって概観してみよう。

三田盆地で知られる最も古い遺跡は、旧石器時代後期前半に遡る溝口遺跡である。溝口遺跡では、在地のチャートを用いたナイフ形石器とともに石斧が出土しており[2]、石器群の技術的特徴から、県下の後期旧石器時代の石器群でも最古の一群に属するものと考えられている。その他の後期旧石器時代の遺跡としては、青野ダム遺跡群の中に、石器出土地点が散在している[3]。

縄文時代の遺跡は、盆地周辺の扇状地上に分布が知られている。屋敷町遺跡に近い段丘の先端部には、対中遺跡が立地する[4]。また先述の青野ダム遺跡群内にも石鏃や有舌尖頭器の出土地点が分布している。

弥生時代前期には、盆地南東部に餅田遺跡が出現する。三田盆地最古の弥生時代遺跡であり、弥生時代後期まで集落が断続的に営まれている[5]。

弥生時代中期になると遺跡数の飛躍的増大が見られる。西山＝屋敷町台地の北方に続く丘陵には、銅鐸鋳型を出土した平方遺跡[6]、多数のサヌカイト製石器を出土した奈カリ与遺跡[7]、大規模集落である有鼻遺跡が、また屋敷町遺跡の北西の丘陵上には天神遺跡が知られている[8]。弥生時代後期には、武庫川の沖積平地にも集落が営まれるようになり、その左岸に川除遺跡が成立する[9]。

古墳時代の集落は、弥生時代の集落に概ね重なって出現しているとされる[10]。古墳は盆地周辺の丘陵上に造営された例が多いが、特に後期古墳は石棚をもつ横穴式石室、磚を使用した石室、いわゆる「カマド塚」型の木室墳など、多様な様相をみせている。また周辺丘陵には須恵器窯がつくられ、窯業生産

1 奈良山遺跡　2 奈カリ与遺跡　3 釜屋城跡　4 下所遺跡　5 五良谷古墳群　6 興元古墳群
7 貴志・樋戸遺跡　8 矢ノ原古墳群　9 貴志遺跡　10 下深田・城戸遺跡　11 下深田遺跡
12 川除遺跡　13 川除古墳群　14 下深田・大山遺跡　15 下深田・坂ノ下遺跡　16 三田谷古墳
17 天神遺跡　18 西山遺跡群　19 三田城（陣屋）跡　20 古城遺跡　21 三輪・餅田遺跡
22 高次・北垣内遺跡　23 桑原遺跡　24 定塚古墳群　25 天皇山古墳群　26 炭焼古墳群　27 対中遺跡
28 宅原遺跡　29 八景中学校南古墳群　30 川北古墳群　31 八幡神社古墳群　32 北神ニュータウン遺跡群
33 塩田遺跡　34 日下部遺跡　35 日下部北遺跡　36 東山中遺跡　37 鯉口古墳群　38 オキダ遺跡
39 二郎古墳群

第3図　周辺の主要遺跡

が開始される。

飛鳥時代以降古代を通じて、三田盆地の周辺丘陵には生産遺跡が顕著に見られるようになる。武庫川の東に広がる末地区の丘陵地帯には、多数の須恵器窯跡が出現し、平安時代後期～鎌倉時代にまで継続する[9]。武庫川西の丘陵には、飛鳥時代～奈良時代の鉄生産に関わったと推定されている奈良山遺跡が知られている。また今回の調査でも瓦が出土した、白鳳期の寺院跡である金心寺址廃寺は、屋敷町遺跡と概ね重複した範囲を占めていたと推定されている。律令制下にあって三田盆地地域は、摂津北部の工業生産の一中心としての機能を果たしていたといえよう。

平安時代末～鎌倉時代にかけては、末地区のほか、隣接する神戸市北区八多町にも須恵器窯が見られるようになる。そのうちのひとつ小名田窯跡では、須恵器椀を中心とした生産が行われているが、この窯跡で生産された片口鉢は、同時期のいわゆる東播系須恵器とは異なる形態を示すとされている[12]。こうしたことから、神戸市北部～三田盆地周辺は、ある程度の独自性を維持した須恵器生産を行っている可能性が勘案される。

中世後半になると、城郭が武庫川に臨む丘陵部に設けられる。居館・城郭を合わせると三十数カ所が知られているが、発掘調査例は多くない[13]。

屋敷町遺跡の呼称となった屋敷町は、16世紀後半に築城された三田城に隣接した地区に整備された武家屋敷群である[14]。三田城はその後、羽柴氏の勢力圏に入り、新たに整備されたといわれている。豊臣氏の後、17世紀前半から明治には九鬼氏が当地を領有するが、従来の三田城は使用されず、その南郭が三田陣屋とされている。

（註）

(1) 山崎敏昭　1995　「遺跡の地理的環境と歴史的環境」『屋敷町遺跡』　三田市教育委員会

(2) 財団法人古代學協会　1986　『溝口遺跡』

(3) 兵庫県教育委員会　1988　『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（2）』

(4) 兵庫県教育委員会　1987　『対中』

(5) (1)に同じ。

(6) 兵庫県教育委員会　1993　『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書3』

(7) 兵庫県教育委員会　1983　『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書2』

(8) 三田市教育委員会　1987　『天神遺跡』

(9) 兵庫県教育委員会　1990　『川除・藤ノ木遺跡』

(10) (1)に同じ。

(11) (3)に同じ。

(12) 兵庫県教育委員会　1997　『小名田窯跡』

(13) 兵庫県教育委員会　1989　『中尾城跡』

(14) 三田市教育委員会　1995　『屋敷町遺跡』

第３章　全面調査の結果

第１節　遺跡の位置と基本層序

１．遺跡の位置

第２章でふれたように、屋敷町遺跡は、三田盆地南部の台地の縁辺部に位置している。調査地区を含む周辺は、弥生～古墳時代集落、古代寺院跡、近世屋敷町等が存在した場所である。調査地は県営大池団地の敷地内であるため、ガス管・水道管の敷地に伴う撹乱が多く見られた。

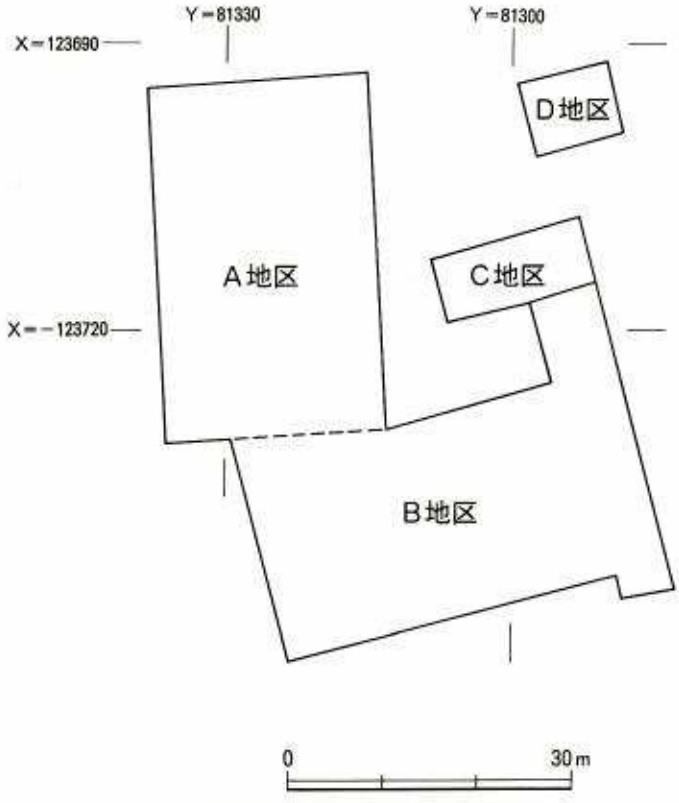
調査区は、Ｌ字形に並ぶ２棟の建物と付属する浄化槽等の掘削を伴う範囲で設定した。

２．基本層序

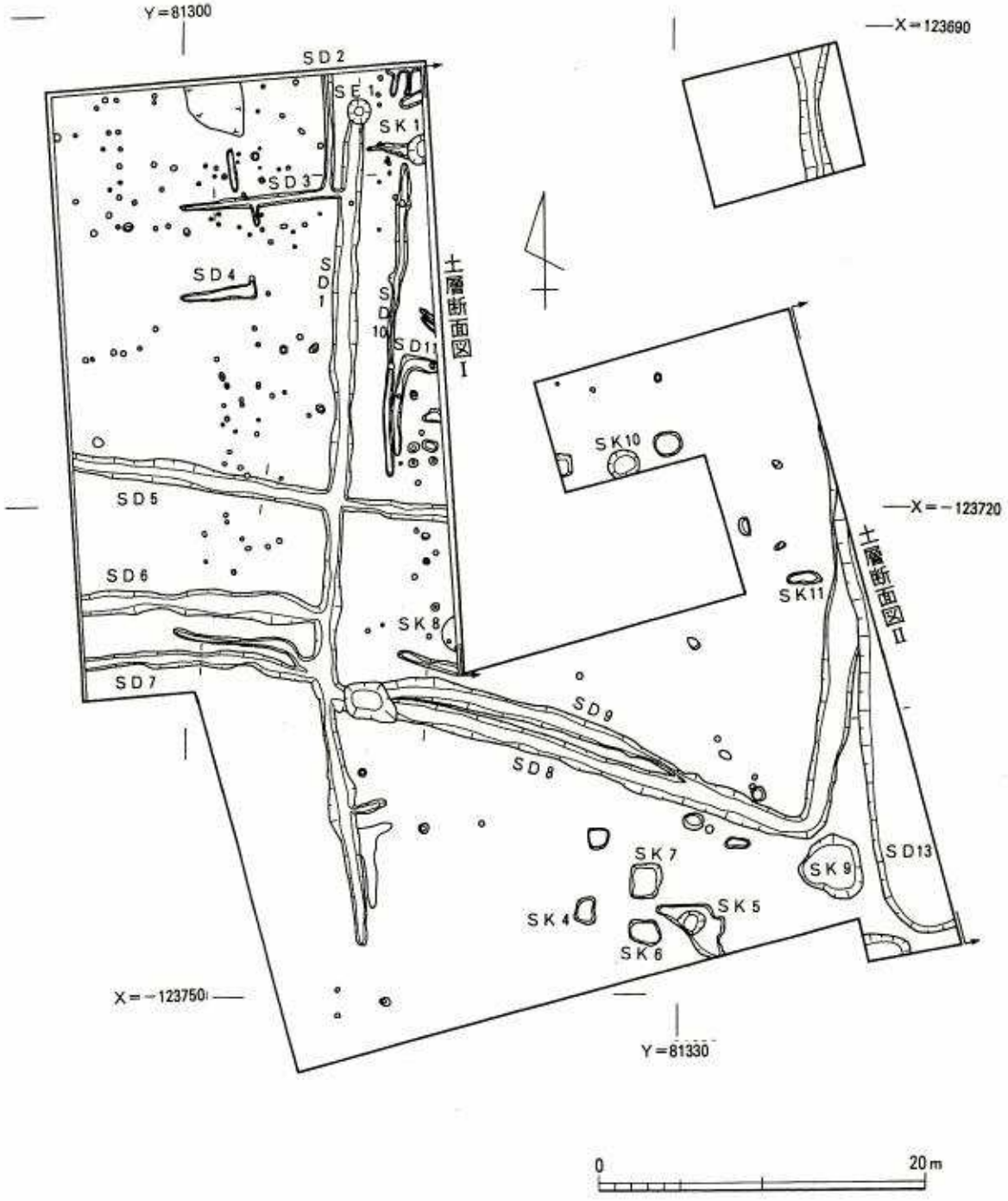
県営住宅の造成地のため、当遺跡の基本層序を良好に確認できた部分は少ない。特に、調査区南側の上層は大きく削平されており、堆積層がほとんど残っていない状況であった。基本層序は、40～60㎝の盛り土があり、その下には10～20㎝の10YR6／2灰黄褐色極細粒砂の水田耕作土とその床土が見られる。遺構面は、その下の黄褐色細粒砂上面で検出することができる。

検出した遺構は、中世の溝・柱穴・井戸などである。これらの遺構は主に調査区の北半部で検出している。

調査区は不整形であるため、便宜上Ａ～Ｄ地区を設定した。（第４図）

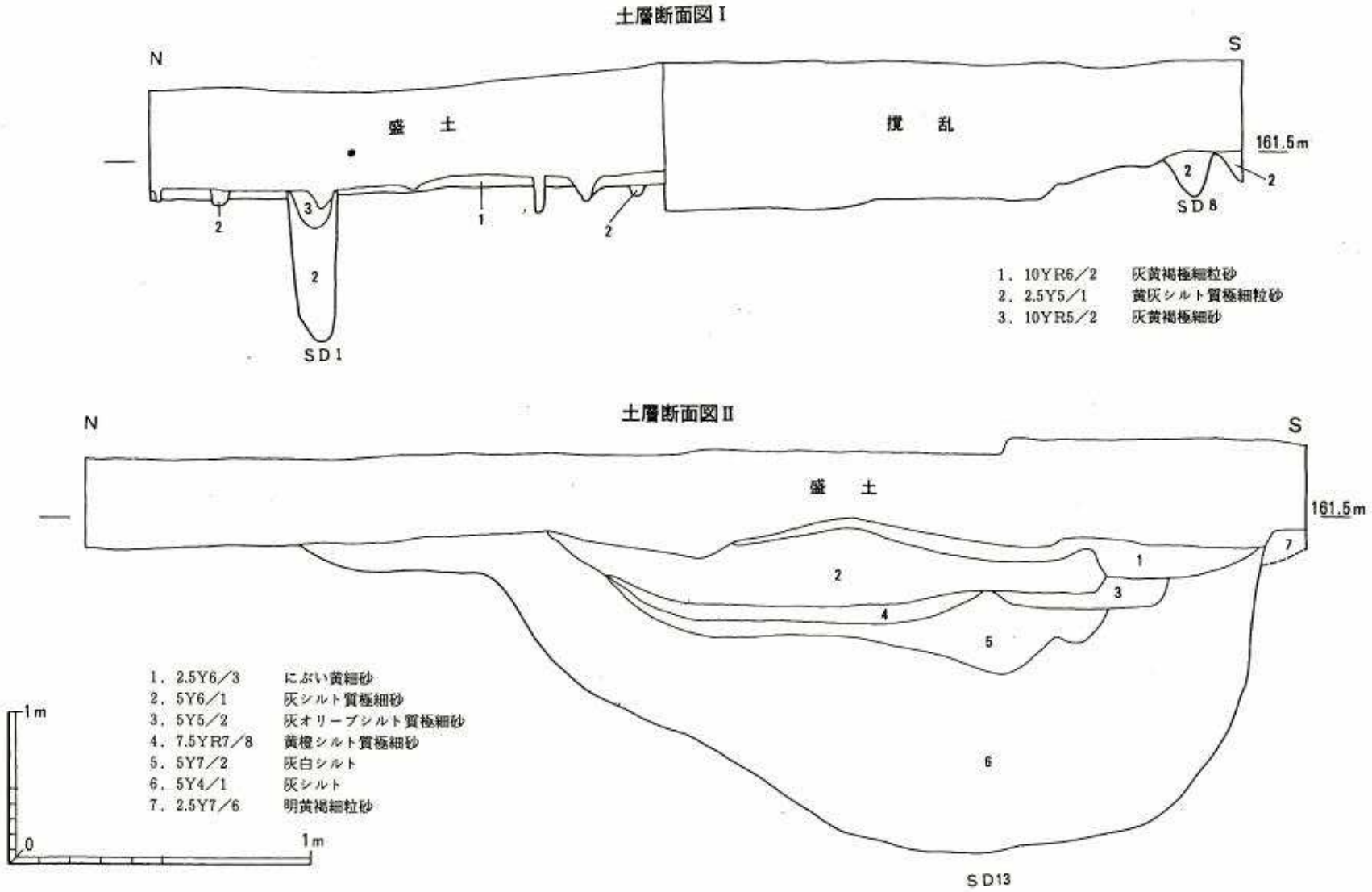


第４図　調査区地区割り図


Y=81300
X=123690
SD2
SE1
SK1
SD3
SD4
SD1
SD10
SD11
土層断面図I
SK10
X=−123720
SD5
SD6
SK8
SK11
土層断面図II
SD7
SD9
SD8
SK7
SK9
SD13
SK4
SK5
SK6
X=−123750
Y=81330
0
20m

第5図　調査区全体図

第69図　土層断面図Ⅰ・Ⅱ



第２節　遺構と遺物

屋敷町遺跡では、溝・土壙・井戸・柱穴を検出した。遺物は、コンテナ（セキスイＴＳ28）で５箱分が出土した。遺物が少量のため、細片も図化することを心掛けた。

１．溝

ＳＤ１（第５図・第７図・第８図・第15図）

遺構　　Ａ地区・Ｂ地区の南北に延びる溝である。両端とも調査区内で収束している。長さ50m、最大幅1.6m、深さ0.48mを測り、北端はＳＥ１と重複している。南側は、ＳＤ５と交差し、ＳＤ６・ＳＤ８・ＳＤ９につながっている。断面形は、皿状を呈し、埋土は、10ＹＲ５／2灰黄褐色極細粒砂一層からなる。

出土遺物　　須恵器蓋（１）杯（２）鉢（３）、土師器堝（４）青磁碗（５）、平瓦（95）が出土している。

１は、つまみの部分がわずかに残っている。２は、貼り付け高台をもつ杯の底部である。高台の断面形は台形状で、「ハ」の字状に開く。３は、平底の鉢の底部である。体部下方の外面はヘラ削りを施している。４は、口縁端部を外側につまみ出す堝の口縁部である。５は、外面には蓮弁紋、見込みには、草花紋が印花され、畳付以下は、露胎となっている。釉層は厚く、色調は暗緑色を呈する。95は、凹面には、布目痕が残り、凸面には、格子状タタキを施す平瓦の細片である。

ＳＤ２（第５図・第７図・第８図・第15図）

遺構　　Ａ地区北側にあり、南北方向に延びるＳＤ１の東側に平行する溝である。長さ6.8m、最大幅0.8m、深さ0.07mを測り、南端でＳＤ３につながっている。断面形は、台形状を呈し、埋土は、10ＹＲ6／2灰黄褐色極細粒砂一層からなる。

出土遺物　　須恵器椀（６・７）甕（８）、土師器堝（９～10）、軒平瓦（90）が出土している。

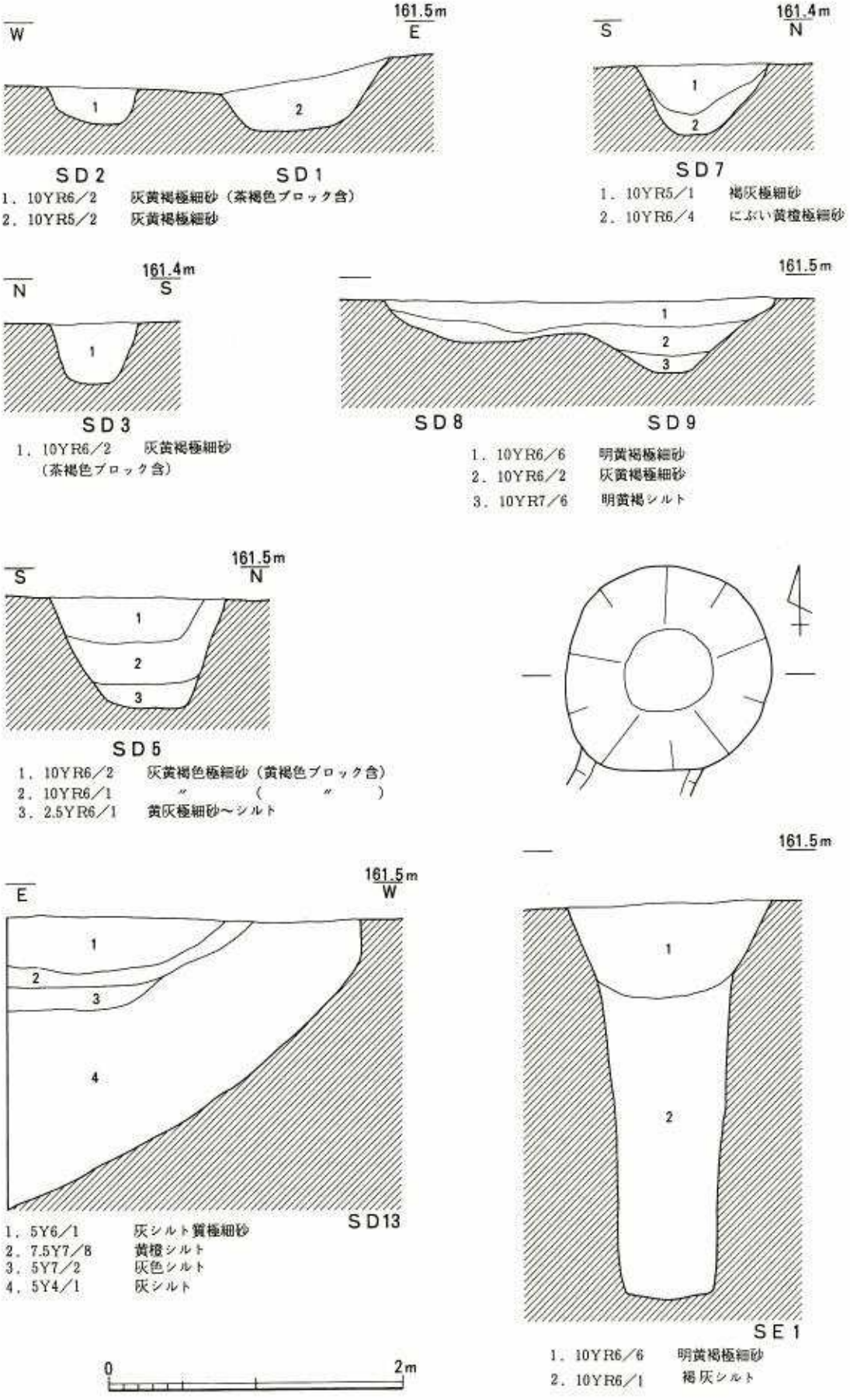
６は、平底の椀の底部、７は、平高台の底部から、体部は口縁部に向かって外上方に開く形態の椀である。８は、外面に矢羽根状タタキを施している甕の胴部片である。内面にはあて具痕がある。焼成は少し甘い。

９は、口縁端部を外方につまみだし、頚部は「く」の字状に屈曲する。外面は平行タタキを残す。色調は暗褐色を呈し、硬質である。10も、口縁端部は外方につまみだし、頚部は、「く」の字状に屈曲した形態をもつ。外面は平行タタキを残す。

90は偏行唐草文の軒平瓦である。内区は左から右に流れる偏行唐草文をおき、上外区には珠文をおく。凹面には、布目痕が残り、凸面には、ナデ調整を施す。

ＳＤ３（第５図・第７図・第８図）

遺構　　Ａ地区北側で検出された、東西方向に延びる溝である。長さ10m、最大幅1m、深さ0.4mを測り、東端では、ＳＤ１とＳＤ２につながっている。断面形は、台形状を呈し、埋土は、



第7図　SD断面図・SE1平面図・断面図

10YR6／2灰黄褐色極細粒砂一層からなる。

出土遺物　土師器塝（11）が出土している。

口縁端部を外方につまみだし、頸部は「く」の字状に屈曲する。外面は平行タタキを残す。内面はナデを施す。色調は暗褐色を呈し、硬質である。

SD4（第5図）

遺構　A地区中央で検出した東西方向に延びる小規模な溝である。長さ2.4m、最大幅0.4m、深さ0.05mを測る。

出土遺物　遺物は出土していない。

SD5（第6図・第7図・第8図）

遺構　A地区中央で検出された東西方向に延びる溝である。長さ23.6m以上、最大幅1.6m、深さ0.76mを測り、SD1と交差している。また、両端とも調査区外に延びている。断面形は、台形状を呈し、埋土は3層からなる。上2層には、基盤層の土がブロック状に混入しており、短期間に人為的に埋められたものと考えられる。SD1との関係は、SD5のほうが深く掘られているため、開鑿時期については新しくつくられた可能性がある。しかし、出土土器からは時期差は認められず、埋没時期は同時期であったと考えられる。

出土遺物　須恵器椀（12～14）、土師器杯（15）瓦器椀（17・18）皿（16）が出土している。

12は、体部は口縁部へ直線的に伸びる形態である。13は、平底の底部から体部はそのまま外側に開く。体部の器壁はやや薄く、口縁部で少し肥厚し端部は丸くおさめる。14は、平底の底部から体部は口縁部に向かって直線的に伸びる。粘土紐の成形痕が顕著に残る粗雑なつくりである。

15は、形がややいびつで、口縁下部外面に一段のナデを施す。底部は欠落しているため、切り離しの技法は不明である。16は平底の底部から体部は外に開く浅い皿である。手づくね成形ののち、口縁部内外にナデを施す。17は、高台は断面三角形状の貼り付け高台で、体部中央には、凹線を施し、口縁部へ向かってやや内弯する。外面のミガキは観察できないが、内面では一定方向のミガキが確認できる。18も高台は断面三角形状の貼り付け高台で、体部中央に強いナデを施し、口縁部へ向かってやや内弯する。内外面の調整については、磨耗が著しく観察できない。

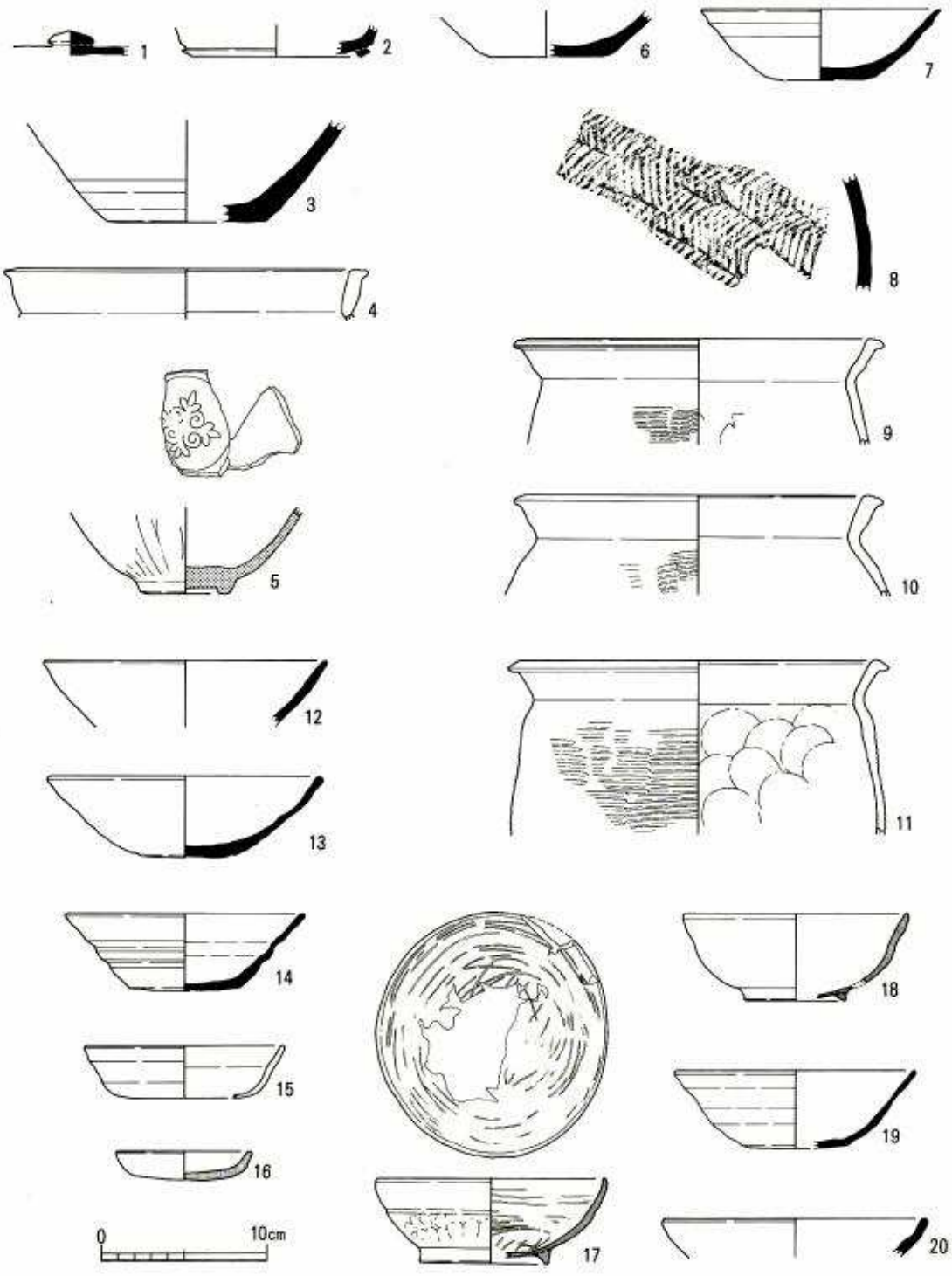
SD6（第5図）

遺構　A地区南側で検出された、東西方向に延びる溝である。長さ14.4m以上、最大幅2m、深さ0.07mを測り、東端は調査区外に延び、西側はSD1につながっている。

出土遺物　遺物は出土していない。

SD7（第5図・第7図・第8図）

遺構　A地区南側で検出された、東西方向に延びる溝である。長さ14m以上、最大幅1.2m、深さ0.48mを測り、東端は、調査区外に延び、西側は、SD1とつながっている。断面形



第8図　ＳＤ１～７出土遺物

は、皿状を呈し、埋土は、2層からなる。

出土遺物　須恵器椀（19・20）が出土している。

19は平底の底部から体部はそのまま外側に開く形態であり、底部と体部の界は不明瞭である。器壁は薄い。20は、口縁端部が少し内弯する形態である。

ＳＤ８（第５図・第７図・第９図・第15図）

遺構　Ｂ地区中央で検出された、東西方向に延びる溝である。長さ78.4m、最大幅２m、深さ0.28mを測り、東端は、ＳＤ１・ＳＤ９につながり、西側は、調査区西端で北にほぼ直角に曲がる。また、ＳＤ１との境の部分は他の部分より0.2mほど深く掘りこまれている。断面形は浅い皿状で、埋土は２層からなる。

出土遺物　須恵器椀（21～23・26）鉢（24）高坏（28）、土師器鍋（25・29～31）、丹波焼擂鉢（32）、青磁碗（33）皿（34）、石鍋（35）、平瓦（92～94・97）丸瓦（98）、フイゴの羽口（36）が出土している。

21は、底部は平底で、体部は口縁部に向かってやや直線的に伸びる形態である。底部は、少し厚いつくりである。22は、底部は平底で体部は口縁部に向かって直線的に伸び、口縁端部でやや外反する。23は、底部は平底で体部は口縁部に向かって直線的に伸びる形態であり、器壁は大変薄く器高も低い。26は平底椀である。底部は未調整で糸切り痕が残る。24は、底部は未調整で糸切り痕を残し、体部外面は回転ナデ、内面は回転ナデののちナデ調整を施す。27は、細片のため形態は不明である。28は、高坏の脚部である。

25は口縁端部を外方につまみだし、頸部は「く」の字状に屈曲する。外面は平行タタキが残る。色調は暗褐色を呈し、硬質である。29・30も口縁端部を外方に強くつまみだし、頸部は、「く」の字状に屈曲する。外面は平行タタキが残る。31は、口縁端部は上方に面をもち、頸部は、「く」の字状に屈曲する。外面は平行タタキが残る。磨耗が著しいため、内面の調整は不明である。

32は内面にヘラ描きで、オロシ目を施す。色調は、赤褐色を呈する。

33は外面に鎬蓮弁紋が施紋される青磁碗である。体部はやや内弯気味にたちあがり、口縁端部はやや外反する。色調は淡緑色を呈し、釉層は比較的厚い。34は平底で、底部内面に櫛描文を施紋する。外面は露胎である。釉調はガラス質で、色調は黄緑色を呈する。

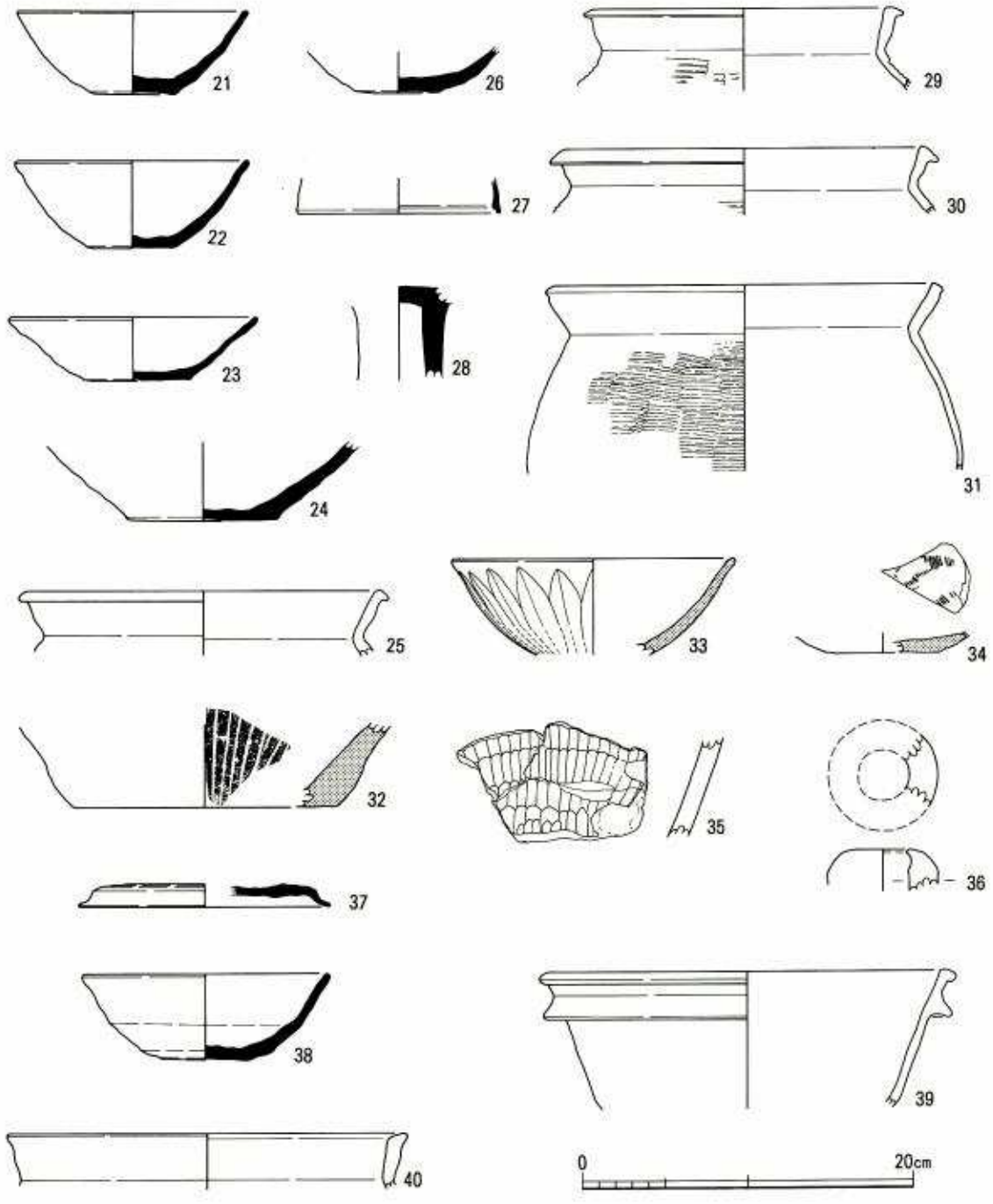
35は石鍋の体部の破片と考えられる。外面には、ノミの調整痕が残っており、横方向に１段ずつ調整している。

92～95は、凹面には、布目痕が残り、凸面には、格子状タタキを施し、97は凹面には、布目痕が残り、凸面には、平行タタキを施す平瓦の細片である。98は、細片であるが、凸面にハケ調整が残っている。

36はフイゴ羽口の破片である。細片であるが中空の部分が確認できる。

ＳＤ９（第５図・第７図・第９図）

遺構　Ｂ地区中央で検出された、東西方向に延びる溝である。長さ20m、最大幅1.6m、深さ0.48mを測り、東端・西端とも、ＳＤ８につながるため、ＳＤ８の一部ともと考えるが、



第9図　ＳＤ８～11出土遺物

ここではＳＤ９として報告する。ＳＤ８より深く掘削されており、埋土は３層からなる。

出土遺物　須恵器蓋（37）・椀（38）、土師器羽釜（39）が出土している。37は扁平な頂部をもち、端部は外方に屈曲する。38は平底で、体部は口縁部に向かって直線的に伸びる。39は、口縁端部を外側につまみだし、断面三角形状の鍔を貼り付けている。内外面ともナデ調整を施す。

ＳＤ10（第５図）

遺構　Ａ地区東側で検出された、南北方向に延びる溝である。長さ19.2ｍ、最大幅0.8ｍ、深さ0.05ｍを測り、両端とも調査区内で収束している。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＤ11（第５図）

遺構　Ａ地区東側で検出された、逆Ｌ字状に屈曲する溝である。長さ8.0ｍ以上、最大幅1.0m、深さ0.07ｍを測り、東側は調査区外に延びる。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＤ12（第５図）

遺構　Ａ地区南東側で検出された、東西方向に延びる溝である。長さ8.4ｍ以上、最大幅0.8m、深さ0.15ｍを測り、東端は調査区外に延びている。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＤ13（第５図・第７図）

遺構　Ｂ地区東側で検出された、南北方向に延びる溝である。長さ32.8ｍ以上、最大幅4ｍ、深さ2.0ｍを測り、両端とも調査区外に延びている。この溝はＳＤ８と重複しており、切り合い関係からＳＤ８より新しいと考えている。検出面からの深さが２ｍ以上になるため完掘はできず、部分的にトレンチをいれて断面観察を行った。埋土は、４層からなっており、最下層は有機物を含むヘドロが１ｍ以上堆積しているのが観察できた。

出土遺物　遺物は出土していない。

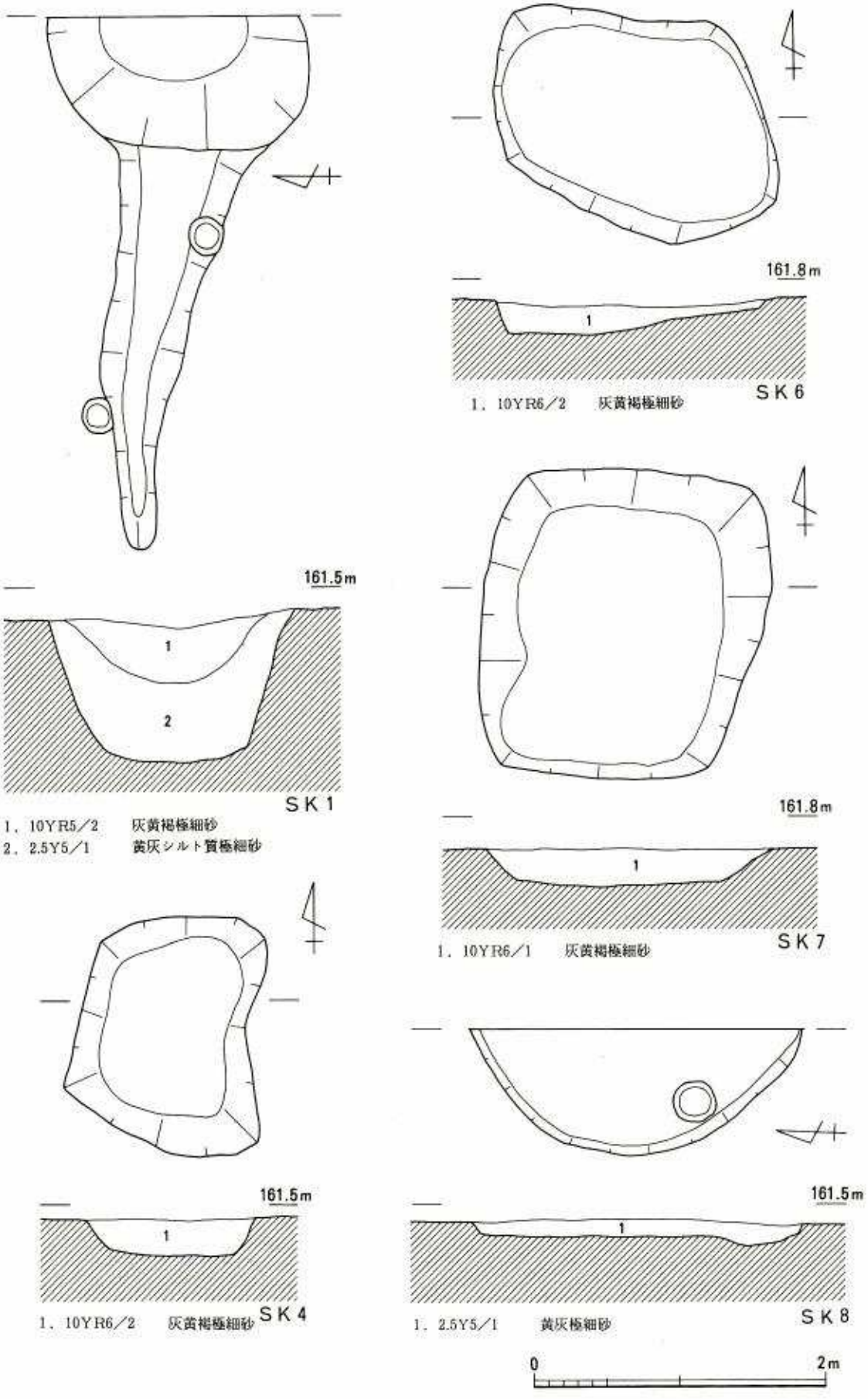
２．土坑

ＳＫ１（第10図・第12図）

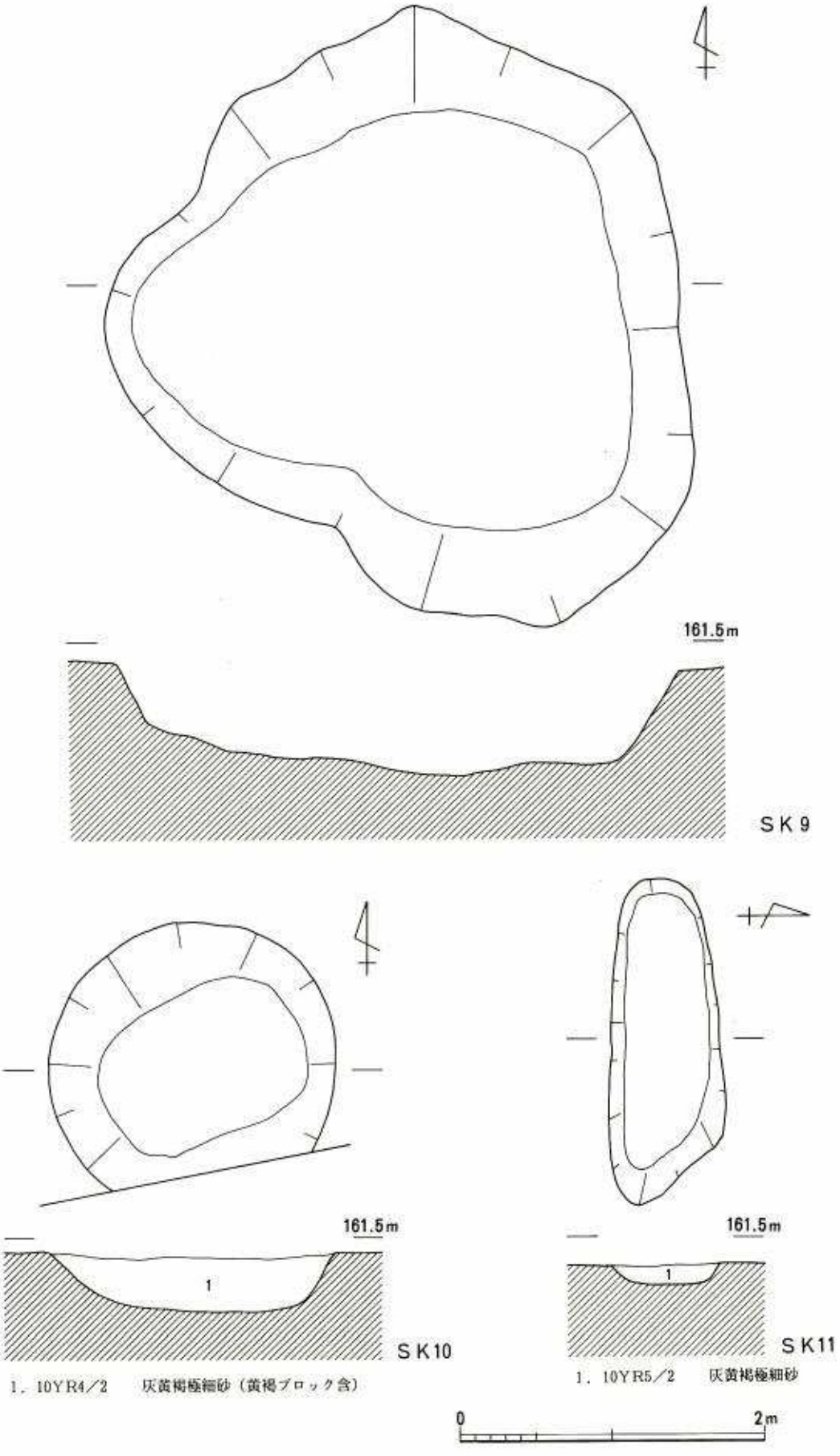
遺構　Ａ地区北東で検出され、東半部は調査区外にかかっている。平面形は、楕円形を呈し、長軸1.8ｍ、短軸1.0ｍ、深さ1.0ｍを測る。埋土は２層からなる。

出土遺物　須恵器椀（41～42）、土師器塊（43）・羽釜（44）が出土している。

41は平底の底部から体部は口縁部に向かってそのまま外側に開く。42は平底椀の底部である。43は、口縁端部を外側につまみだし、頸部はくの字状に屈曲する。外面にはタタキが残る。44は口縁端部が肥厚し、断面台形のやや幅の広い鍔を貼り付けている。外面はタ



第10図　ＳＫ平面図・断面図　(1)



第11図　ＳＫ平面図・断面図　(2)

タキが残り、内面はハケ調整を施す。

ＳＫ４（第10図・第12図）

遺構　　Ｂ地区南側で検出された。平面形状は、隅丸方形を呈し、長軸1.6ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.24ｍを測る。埋土は、10ＹＲ6／2灰黄褐色極細粒砂１層からなる。

出土遺物　　45は、平底の底部をもつ須恵器椀の破片である。

ＳＫ６（第10図・第12図）

遺構　　Ｂ地区南側で検出された。平面形状は、楕円状を呈し、長軸2.2m、短軸1.3m、深さ0.24mを測る。埋土は10ＹＲ6／2灰黄褐色極細粒砂１層からなる。

出土遺物　　46は、須恵器杯の底部である。断面形が方形の低い輪高台を貼り付ける。

ＳＫ７（第10図・第12図）

遺構　　Ｂ地区南側で検出された。平面形は、隅丸方形を呈し、長軸2.2m、短軸2.0m、深さ0.24ｍを測る。埋土は10ＹＲ6／1灰黄褐色極細粒砂１層からなる。

出土遺物　　47は、須恵器の杯蓋である。口縁部内面のかえりが下方に張り出す。頂部は欠損している。

ＳＫ８（第10図・第12図）

遺構　　Ａ地区南東で検出された。平面形は、円形で、東半部は調査区外にかかっている。直径2.3ｍ、深さ0.16ｍを測る。埋土は2.5ＹＲ5／1黄灰色極細粒砂１層からなる。

出土遺物　　須恵器椀（48）、土師器塝（49）羽釜（50）が出土した。

48は体部は口縁部にむかって直線的に延び、口縁端部は尖り気味である。49は口縁端部を外側につまみだす。50は口縁端部を水平方向につまみだし、体部の上面に断面台形状の鍔を貼り付ける。

ＳＫ９（第11図・第12図）

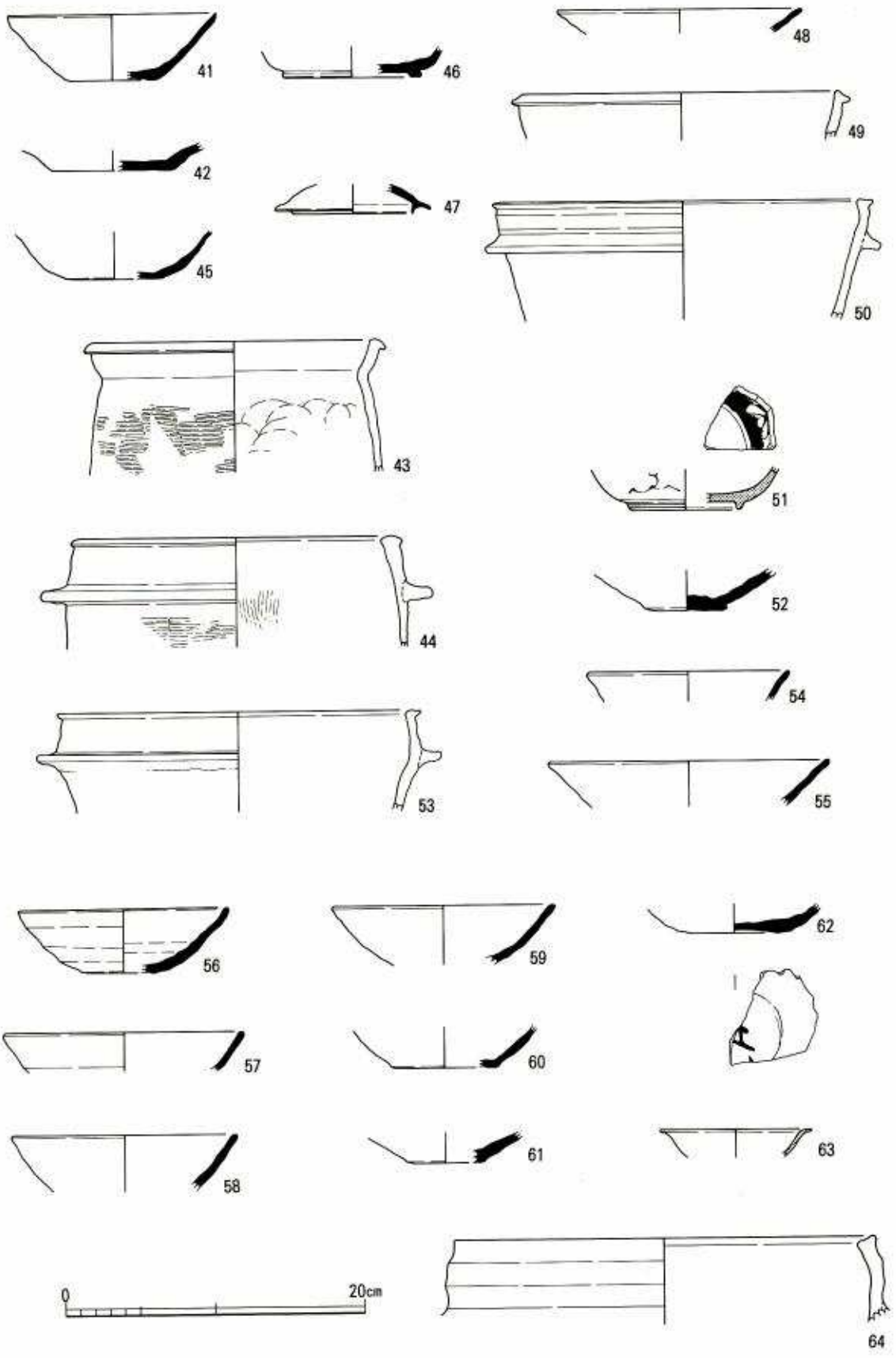
遺構　　Ｂ地区南側で検出された。平面形状は、楕円形を呈し、長軸4.0ｍ、短軸3.8m、深さ0.68ｍを測る。

出土遺物　　51は粗製の染付磁器皿である。水引き轆轤成形ののち、やや黒みをおびた呉須で、内面には笹文、外面には唐草文を描く。色調は、やや青みを帯びる灰白色を呈する。

ＳＫ10（第11図・第12図）

遺構　　Ｃ地区南側で検出された。平面形状は、円形を呈し、南端が調査区外にかかっている。直径1.9ｍ、深さ0.36ｍを測る。埋土は10ＹＲ4／2灰黄褐色極細粒砂１層からなる。

出土遺物　　52は平高台の底部をもつ須恵器椀である。



第12図　ＳＫ１～11・柱穴群出土遺物

ＳＫ11（第11図・第12図）

遺構　　Ｃ地区南側で検出された。平面形は、長方形で、長軸は東西方向を示す。長軸2.1ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.12ｍを測る。埋土は10ＹＲ5／2灰黄褐色極細粒砂１層からなる。

出土遺物　　須恵器椀（54・55）、土師器羽釜（53）が出土している。

54・55は、体部は口縁部に向かって直線的にのびる。53は口縁端部を水平方向に外側につまみ出し、口縁下部は外側にやや膨らむ。やや幅の広い鍔を貼り付け、内外面ともナデ調整を施す。

3．井戸

ＳＥ１（第７図）

遺構　　Ａ地区北側で検出された、素掘りの井戸である。平面形状は円形で、直径1.4ｍ、深さ2.64ｍを測る。この溝の南側は、ＳＤ１と重複しているが、切り合い関係については不明である。

出土遺物　　遺物は出土していない。

4．柱穴群（第５図・第12図）

Ａ地区北東側では多くの柱穴を検出している。柱穴の規模は20㎝前後と小さく、遺物の出土は、柱穴群の一部に限られている。しかし、出土した土器はすべて、中世に属するものであり、遺物の出土が見られなかった柱穴についても同時期のものと考えている。柱穴群は多数検出されているが、その配置には規則性が認められず、建物群を復元するには至っていない。

出土遺物には、須恵器椀（56～62）、白磁皿（63）土師器鍋（64）がある。

62は、底部の外面に墨書が認められるが、破片のため、文字は判読できない。63は、口縁部が外反する皿である。内外面とも、施釉され、色調は乳白色を呈する。64は口縁端部上面に面をもつ羽釜の口縁部である。

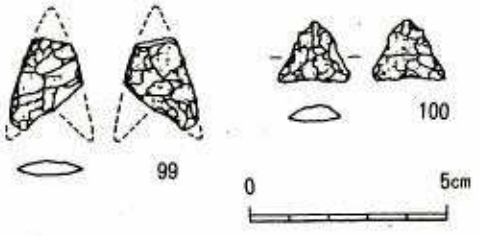
5．包含層の出土遺物（第13図・第14図）

出土遺物には、石器、須恵器、土師器、白磁、陶器、瓦、銅銭がある。

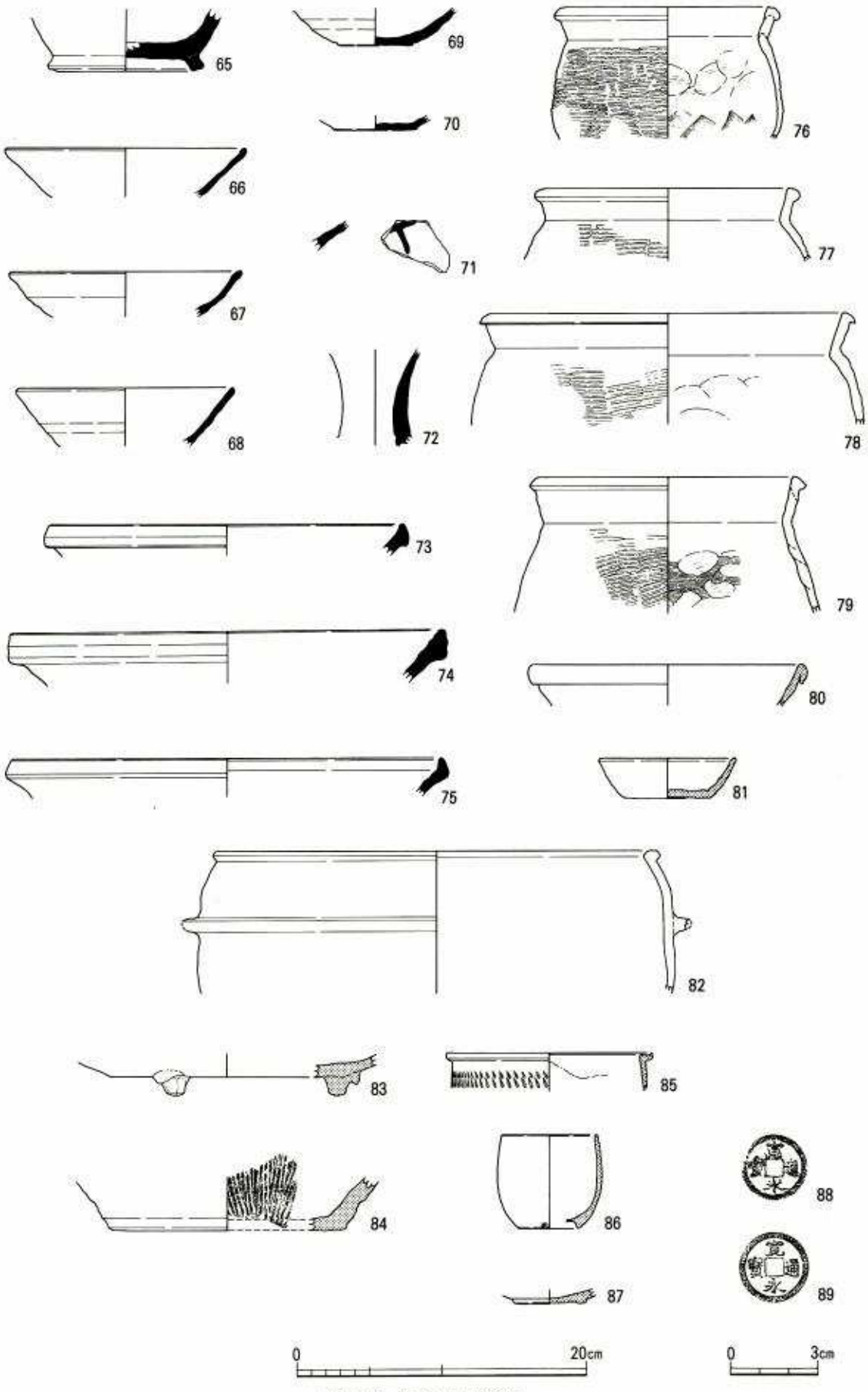
石器　　石器は２点が出土した。

99はサヌカイト製の凹基無茎式石鏃である。先端と一方の脚を欠損している。器面は、斜行する丁寧な押圧剥離が施されている。長さ22.5㎜、幅18.5㎜、厚さ3.5㎜、重量1.4ｇ。

100は五角形を呈する、サヌカイト



第13図　包含層出土の石器



第14図　包含層出土遺物

製凹基無茎式石鏃である。一方の脚の先端を欠くが、長さより幅が大きい。先端は両側縁とも抉るような二次加工が施されており、鋭利整形されていたものと思われる。

長さ15.5㎜、幅18.3㎜、厚さ3.9㎜、重量0.8ｇ。

これらの石鏃の所属時期は、判断の根拠に乏しいが、その形態から、ともに縄文時代に属するものと考えて大過ないだろう。

須恵器　65は壺底部である。高台の断面形状は方形を呈し、「ハ」の字状に外方に開く。66～68はいずれも体部が口縁部に向かって直線的にのびる形態の椀である。69・70は平底椀、71は体部に墨書が認められるが、破片のため、文字は判読できない。72は長頸壺の頸部である。口縁端部は欠損している。73～75は鉢の口縁端部である。73・75は口縁端部をつまみ上げる形態で、74は口縁端部がやや垂下する。

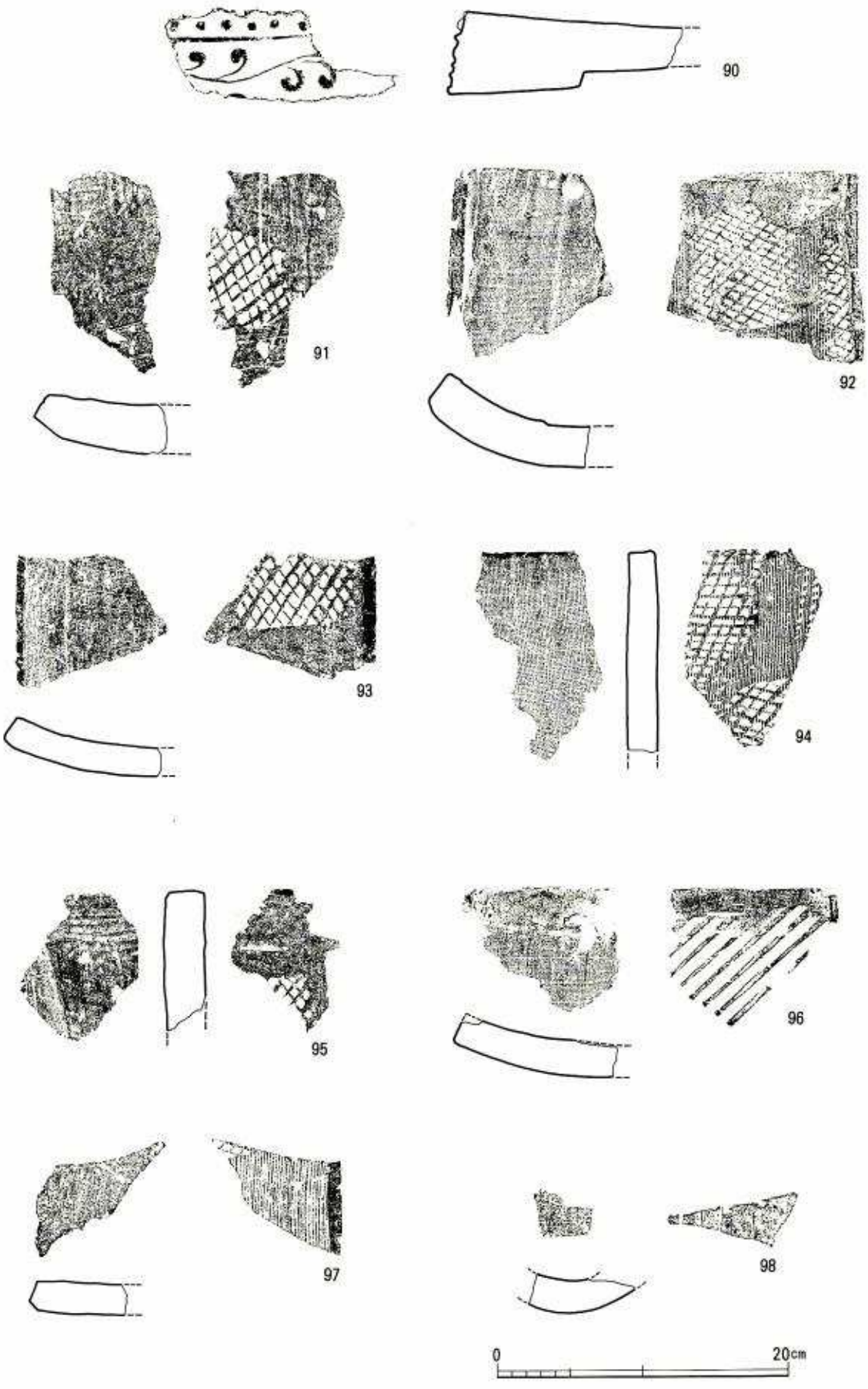
土師器　76～79は、土師器塙である。口縁端部を外方につまみだし、頸部は「く」の字状に屈曲する。外面には、タタキが残り、内面にはハケ調整を行う。82は土師器の羽釜である。体部は口縁部に向かってやや内傾し、口縁端部を水平につまみ出す。体部には、断面台形状の幅の狭い鍔を貼り付けている。磨耗が著しいため、内外面の調整は不明である。

白磁　80は口縁端部が玉縁状を呈し、内外面に施釉される碗である。色調は灰白色を呈する。器面には気泡が認められる。81は皿である。底部は平底で、内外面に施釉されるが、底部外面は露胎となっている。口縁端部の釉をかきとるいわゆる口禿の皿である。81は、皿の底部である。幅の広い浅い高台を削りだす。内面は施釉され、色調は灰白色を呈する。外面は露胎である。

陶器　83は瀬戸焼の盤の底部である。外面は無釉、内面には灰釉が施され、一部灰をかぶっている。84は丹波焼の擂鉢の底部で、内面にクシ描きのオロシ目を密に施す。内外面に泥漿を塗布する。85は施釉陶器の鍋である。体部は垂直に立ち上がり口縁部を大きく外反させるいわゆる行平鍋である。体部外面にはヘラ状工具でトビガンナを施し、外面には鉄釉、内面には灰釉を施している。86は京焼系陶器の湯飲み椀である。底部は碁笥底状に成形し、体部は口縁部に向かってやや内弯する。内外面に透明釉を施し、色調は淡黄褐色を呈する。

瓦　91は、凹面には、布目痕が残り、凸面には、格子状タタキを施し、96は凹面には、布目痕が残り、凸面には、平行タタキを施す平瓦の細片である。

銅銭　88・89はいずれも寛永通宝である、89は比較的残りが良い。



第15図　出土瓦

第4章　屋敷町遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学　三　辻　利　一

須恵器の産地を探すにはまず、K－Ca、Rb－Srの両分布図を作成し、対応する窯跡群を探す。そして、生産と供給の同時性という条件を入れて、生産地候補となる窯跡群を選び出す。最後にこれら産地候補となった窯跡群に2群間判別分析を適応し、産地を推定する。

これが産地推定法の概略である。この方法を適用して、須恵器の伝播・流通論を展開するには、これらに方法論を整理しておくことが必要である。通常、筆者は複合遺跡である場合、古いところから新しいところまで、同一複合遺跡から100、200点といった大量の資料片を採集し分析する。須恵器の生産と供給の状況が変わっておれば、時間軸上のどこかで胎土も変わっているはずである。このように、生産と供給の流れの変遷をつかまえることが必要である。蛍光X線分析の特徴は大量の試料処理が出来る点にあり、この特徴を生かせば、須恵器の生産と供給の流れをつかまえることは出来るはずである。この段階に至ってはじめて、須恵器の伝播・流通論の展開が可能となる。この研究段階に到達するためには、分析する側にも、試料を採集する側にも意識改革が必要である。

以上の点を前置きとして、本報告では、屋敷町遺跡から出土した須恵器の分析結果について報告する。

第1表には、分析データをまとめてある。全分析値は同時に測定した岩石標準試料、JG－1による標準化値で表示してある。

この分析データを理解するためには、この分析データに基づいてK－Ca、Rb－Srの両分布図を作成することが必要である。この分布図上で、多試料のもつ化学特性を理解することができる。第16図には両分布図を示す。

試料の中には、須恵器ではないと思われる塝・羽釜が含まれているので、これらを除去して考察を進める。両分布図でK、Ca、Rb、Sr量が少なく両分布図の左下部分にまとまって分布する試料がある。No.1（鉢）、No.10（椀）、No.16、17（ともに鉢）、No.19、20、21（ともに鉢）である。これらは神出窯群の須恵器と相通じる化学特性をもつ。もし、今回分析した試料の中に東播系の須恵器があるとすれば、以上の7点の須恵器であろう。

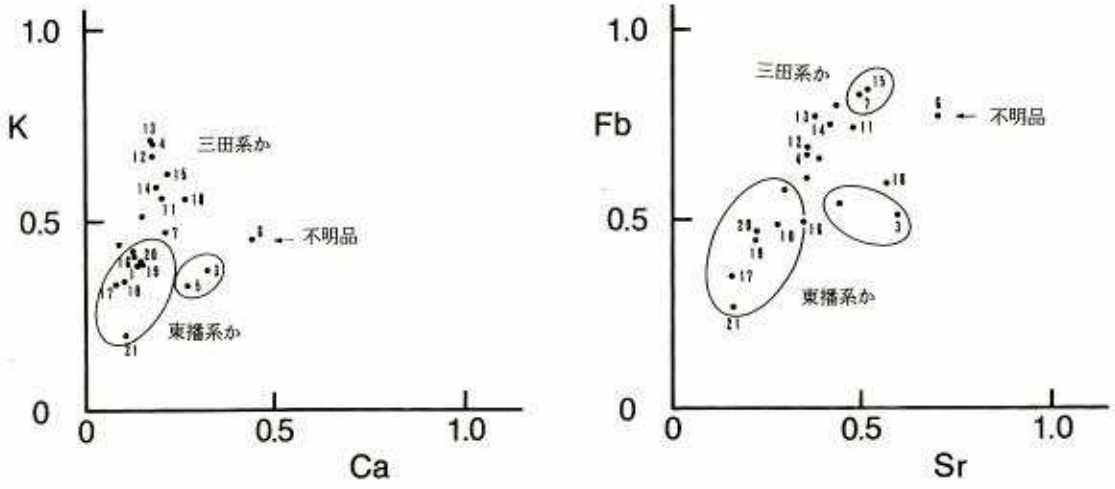
他方、No.4（塝）、No.11（羽釜）、No.12（塝）、No.13、14（ともに羽釜）、の5点の土師器系と思われるものは両分布図でまとまって分布しており、同じところの粘土を素材とした土器であろうと推測される。No.18の塝は、No.4、12の塝とは離れて分布しており、別の場所で製作された可能性もある。

No.3（甕）、No.5（椀）も全因子で類似しており、同一産地の製品である可能性がある。また、No.7、15（ともに椀）も同一産地の製品である可能性がある。しかし、No.6は孤立して分布しており、別の産地の製品と思われる。ここでは一応、産地は不明であるとしておいた。

このように、一応、定性的にでも胎土の化学特性は把握できるものであるが、このままではとても屋敷町遺跡出土須恵器の伝播・流通論を展開するわけにはいかない。もっと組織的なサンプリングの仕方が必要である。そのため、今回は余り決定的なことには論及せず、大雑把に定性的に解読を試みた結果を報告するにとどめた。

第１表　屋敷町遺跡出土土器の分析データ

サンプル番号		図面番号	遺構	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	11-1202	3	SD1	鉢	0.383	0.144	2.11	0.575	0.301	0.133
2	11-1203	7	SD2	椀	0.511	0.154	1.46	0.799	0.435	0.239
3	11-1204	8	SD2	甕	0.377	0.317	1.83	0.510	0.599	0.177
4	11-1205	11	SD3	堝	0.700	0.179	2.12	0.666	0.358	0.168
5	11-1206	13	SD5	椀	0.329	0.266	1.22	0.543	0.455	0.140
6	11-1207	14	SD5	椀	0.452	0.438	1.33	0.772	0.704	0.302
7	11-1208	19	SD7	椀	0.470	0.210	1.49	0.827	0.504	0.240
8	11-1209	21	SD8	椀	0.423	0.128	1.53	0.658	0.390	0.165
9	11-1210	22	SD8	椀	0.437	0.090	0.829	0.614	0.361	0.148
10	11-1211	23	SD8	椀	0.337	0.105	2.19	0.485	0.282	0.166
11	11-1212	39	SD9	羽釜	0.563	0.202	1.60	0.741	0.479	0.214
12	11-1213	43	SK1	堝	0.669	0.174	2.13	0.688	0.361	0.164
13	11-1214	50	SK8	羽釜	0.712	0.172	1.49	0.768	0.377	0.195
14	11-1215	53	SK11	羽釜	0.593	0.183	1.83	0.749	0.418	0.220
15	11-1216	56	P35	椀	0.624	0.216	1.35	0.839	0.517	0.193
16	11-1217	73	包含層	鉢	0.410	0.132	1.91	0.490	0.349	0.249
17	11-1218	75	包含層	鉢	0.327	0.080	1.89	0.349	0.160	0.133
18	11-1219	76	包含層	堝	0.558	0.260	1.81	0.588	0.570	0.410
19	11-1220		包含層	鉢	0.381	0.153	2.14	0.446	0.219	0.134
20	11-1221		包含層	鉢	0.392	0.144	2.25	0.471	0.226	0.137
21	11-1222		包含層	鉢	0.201	0.106	1.93	0.266	0.164	0.086



第16図　屋敷町遺跡出土の両分布図

第5章　まとめ

今回の屋敷町遺跡の調査では、近世の遺構・遺物は少なく、中世の遺構・遺物が中心であった。ここでは中世の遺構・遺物を中心に調査成果についてまとめておく。

第1節. 出土遺物について

1．古代の遺物

古代の遺物には、須恵器高坏、蓋、坏、長頸壺、瓦片がある。須恵器はいずれも細片のため、器形・所属時期とも詳細は不明である。

瓦についても、いずれも細片であり、詳細は不明であるが、軒平瓦が1点確認されている。これらの瓦は、屋敷町付近に寺域が推定されている金心寺址廃寺のものと考えられ、過去、周辺で行われた三田市教育委員会による調査でも、同様の瓦が出土している。[9]

2．中世の遺物

今回の調査で出土した土器のほとんどは中世の土器である。これらの土器は、溝・柱穴群・土坑等の遺構及び包含層中から出土している。土器の種類には、土師器・瓦器・須恵器・国産陶器・中国製の白磁・青磁が含まれる。以下、各土器の器形分類を行い、遺物の検討を行うこととする。

・土師器

堝と羽釜がある。

堝　　全体の器形がわかるものがなく、口縁部のみの出土が多かったため、ここでは、頸部の屈曲の形態と口縁端部の形態で分類を試みた。

Ａ－頸部が「く」の字状に屈曲するもの。

1．口縁端部上面に面をもつもの。31

2．口縁端部を外につまみだすもの。4・9・10・11・25・29・30・31・40・43・49・78

3．口縁端部を折り曲げて、玉縁状に成形するもの。76・77

Ｂ－頸部の屈曲が比較的緩やかなもの。79

羽釜　　堝同様、口縁部のみの出土が多かったため、口縁部と鍔までの長さ、口縁端部の形態、鍔の断面形状の形態で分類を試みた。

Ａ－口縁部と鍔との間が比較的長いもの。82

Ｂ－口縁部と鍔との間が短いもの。

1．口縁端部上面に面をもつもの。44

2．口縁端部を外につまみだすもの。55

3．鍔の断面形状が三角形を呈するもの。39

堝・羽釜の編年・研究については、現在のところ、県下では集成といった形では発表されていない

が、報告書等で報告される例が増加している。土師器鍋については、多可郡中町の門前・上山遺跡[37]、あるいは、神戸市の玉津田中遺跡[38]で編年試案が示されている。ここではそれらに基づいて年代設定を行う。

鍋Ａ１については、古代の甕の系譜を引くもので、門前・上山遺跡のⅠ期に相当し、12世紀後半の時期が考えられる。鍋Ａ２は、今回の調査で最も多く出土した鍋で、門前・上山遺跡のⅡ期に相当し、13世紀代の時期が想定されている。この形態の鍋は、玉津田中遺跡にもみられ、13世紀中葉～後半の時期が与えられている。したがって、鍋Ａ２については、13世紀中葉～後半の時期と考えておきたい。鍋Ａ３は、口縁部の形態変化から、鍋Ａ２より、後出するものと考えられ、門前・上山遺跡のⅡｂ期相当のものと考えられる。したがって、13世紀後半から14世紀前半の時期が考えられる。鍋Ｂは、門前・上山遺跡のⅡＣ期相当のものと考えられ、そこから、14世紀代の時期が想定され、頸部の屈曲の度合いから鍋Ａ３より後出のものと考えられる。

羽釜Ａの形態は、神戸市宅原遺跡[40]のものと類似し、13世紀の時期が考えられる。羽釜Ｂ１・２・Ｂ３については、類例がほとんどみられず、類例からの時期設定は困難である。しかし、鍔の断面形状の形態変化から考えて、Ｂ１・Ｂ２は、Ｂ３に先行するものと考えられる。

・瓦器

屋敷町遺跡で出土した瓦器はわずかに椀２点、小皿１点を数えるのみである。三田盆地の瓦器椀については、対中遺跡[39]出土のものについて考察が行なわれている。対中遺跡の瓦器椀・小皿は、いずれも、内外面に暗文が施されている。しかし、屋敷町遺跡の17・18の瓦器椀はどちらも、外面には暗文が観察できず、内面は、かろうじて暗文が観察できるが、いずれも粗雑なつくりである。このことから、12世紀代に比定される対中遺跡出土の瓦器椀より後出するものと考えられ、13世紀代の時期が考えられる。

・須恵器

椀・鉢がある。

椀　　底部の形態で２種類に大別できる。

Ａ－わずかに平高台をもつもの。52・60・61

Ｂ－高台がなく平底のもの。

1．底部と体部の界が明瞭であるもの。14・21～23・41

2．底部と体部の界が不明瞭であるもの。7・13・19・26・35・67・70

鉢　　口縁端部の形態で２種類に大別できる。

Ａ－口縁端部を垂下させるもの。74

Ｂ－口縁端部をつまみあげるもの。73・75

椀Ａは平高台が退化し、ほとんど高さがなく、底部内面には凹みをもたない形態のものである。森田編年[40]の、第Ⅱ期第１段階に相当し、12世紀の中葉～後半が考えられる。

椀Ｂは、森田編年の第Ⅱ期第２段階に相当し、12世紀後半～13世紀前半の時期が考えられる。

鉢Ａは、森田編年の第Ⅱ期第２段階に相当し、12世紀後半～13世紀前半の時期が考えられる。鉢Ｂは第Ⅲ期第１段階に相当し、13世紀中葉～後半の時期が考えられる。

・無釉陶器

32は、丹波焼の擂鉢で、オロシ目の密度から16世紀後半～17世紀の前半のものと考えられる。

・施釉陶器

83は、瀬戸焼の脚付盤である。底部および口縁部の細片の出土であるため破片であり、詳細な時期設定ができないが口縁端部の形態から考えて、古瀬戸の後期段階、すなわち、14世紀後半～15世紀代のものと考えられる。[m]

・中国製磁器

白磁が3点、青磁が2点出土している。

白磁は、80の玉縁状口縁をもつ横田・森田分類[n]のⅣ類の碗（80）、Ⅸ類の皿（81）、森本分類[o]の高台付皿Ⅱ類（63）が1点ずつ出土している。

青磁は、横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5ｂ類とⅠ－5ｃ類、同安窯系青磁皿Ⅰ－2類が出土している。

所属時期は、白磁は、白磁碗Ⅳ類、高台付皿Ⅱ類、12世紀後半～13世紀前半に、Ⅸ類の皿は、13世紀後半～14世紀初頭にそれぞれ比定される。

また青磁については、同安窯系青磁皿Ⅰ－2は、12世紀後半～13世紀前半、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5ｂ類は13世紀前半、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5ｃ類1は13世紀中葉～後半にそれぞれ比定される。

3．近世の遺物

近世の出土遺物には、無釉陶器・施釉陶器・染付磁器がある。

無釉陶器には丹波焼の擂鉢がある。（32）所属時期は、18世紀後半のものと考えている。

施釉陶器は、2点出土している。近代の京焼系の湯飲み碗（86）、在地産の行平鍋（85）があり、行平鍋は19世紀前半のものと考えられる。

染付磁器は1点出土している。51は肥前系のいわゆるくらわんか手の染付皿で、大橋編年[p]では18世紀中頃～後半のものと考えられる。

（註）

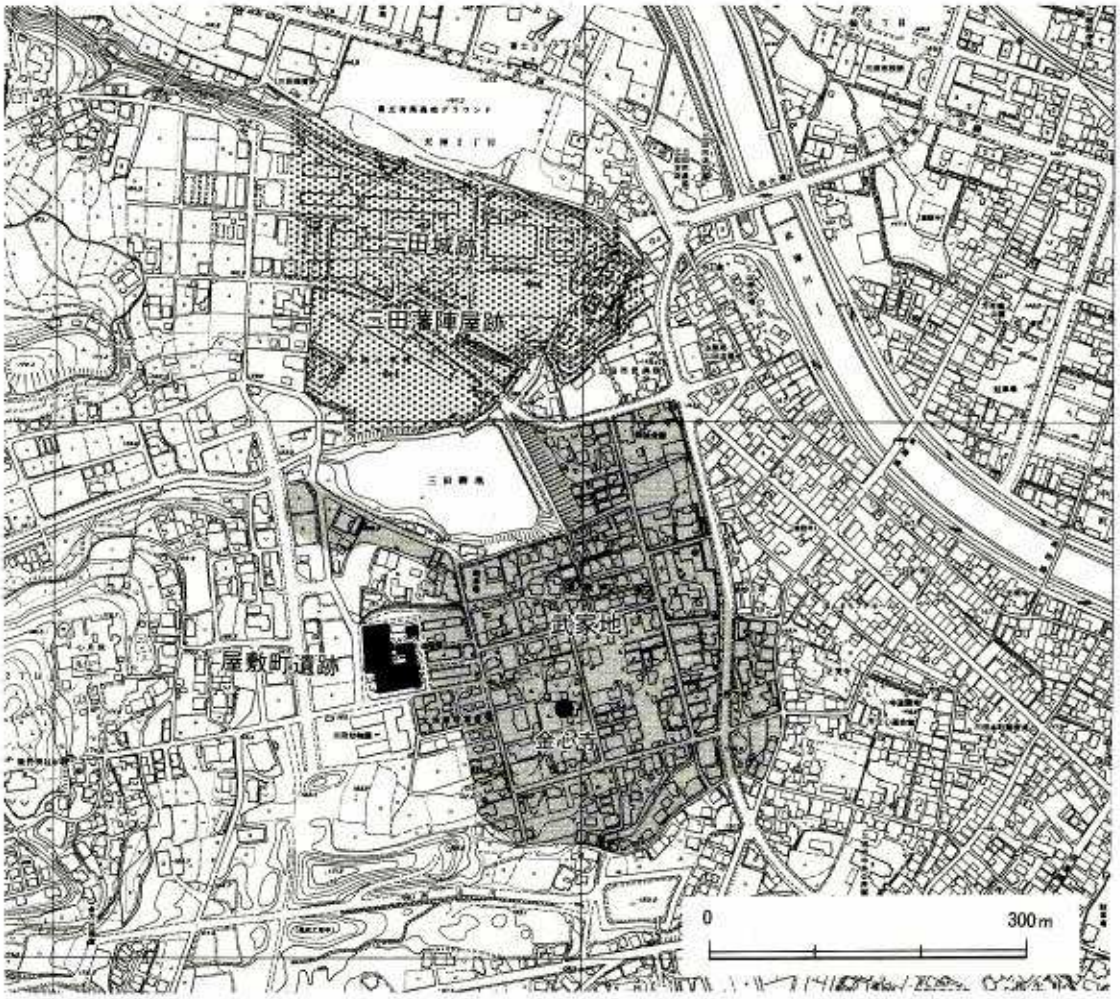
1．津川千恵　1995「屋敷町遺跡出土の古代瓦」『屋敷町遺跡』　三田市教育委員会
　菱田哲郎　1995「屋敷町遺跡出土の古代瓦の位置」『屋敷町遺跡』　三田市教育委員会
2．宮原文隆　1992「中世の土師器竈について」『門前・上山遺跡』　兵庫県多可郡中町教育委員会
3．中川　渉　1996「中世の土器」『玉津田中遺跡－第6分冊－』兵庫県教育委員会
4．妙見山麓遺跡調査会　1988「中近世の遺構と遺物」『宅原遺跡』
5．山田清朝　1988「瓦器・黒色土器について」『対中』兵庫県教育委員会
6．森田　稔　1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号
　1995「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
7．藤澤良祐　1996「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界－その生産と流通－』資料集（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
8．横田賢次郎　森田勉　1978「太宰府出土の輸入陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館論集』4　九州歴史資料館
9．森本朝子　1984「博多貿易陶磁分類表」『博多－福岡市高速鉄道関係埋蔵文化材調査報告Ⅳ』　福岡市教育委員会
10．大橋康二　1984　「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁資料館

第２節．遺構について

今回の調査では、調査区の全域にわたって、溝が多数検出されている。近世の堀と考えられるＳＤ13以外の溝は、大きくは南北方向に延びるものと東西方向のものとに大別ができる。これらの溝は、検出面からの深さに若干の相違が認められるものの、それぞれがつながっていること、埋土に大きな相違がないこと、出土遺物に大きな時期差が認められないことなどから同時期に存在したものと考えている。出土遺物を検討した結果、これらの所属年代は概ね13世紀代の時期が考えられる。

次に、溝の用途について考えてみると、そこには水路としての利用を目的としたものと居住域の区画を目的としたものとの２種類の用途が想定される。区画溝と考えられるものには、Ａ地区の北西部で検出されたＳＤ１とＳＤ５がある。この２つの溝で区画された部分では、建物の復元には至っていないが、柱穴群が多数検出されている。これらの柱穴の規模は直径20㎝前後と比較的小さく、大規模な建物は想定されず、一般的な集落の存在が予想される。出土遺物からこれらの柱穴群の所属時期も溝とほぼ同時期、すなわち13世紀代と考えられる。

また、Ｂ地区のＳＤ８の南側では柱穴群など集落を構成する遺構はほとんど検出されておらず、ＳＤ８は居住域と非居住域を大きく画する溝であった可能性が考えられる。



第17図　屋敷町遺跡周辺図

ＳＤ８の南側で検出されている楕円形もしくは隅丸方形の形状を呈する土坑群については、出土遺物が少なく、所属時期、性格ともに明確ではない。ただし、周辺で過去に行われた調査では粘土採掘坑と考えられる同様の土坑が検出されており[1]、これらの土坑群についても粘土採掘坑の可能性が考えられる。

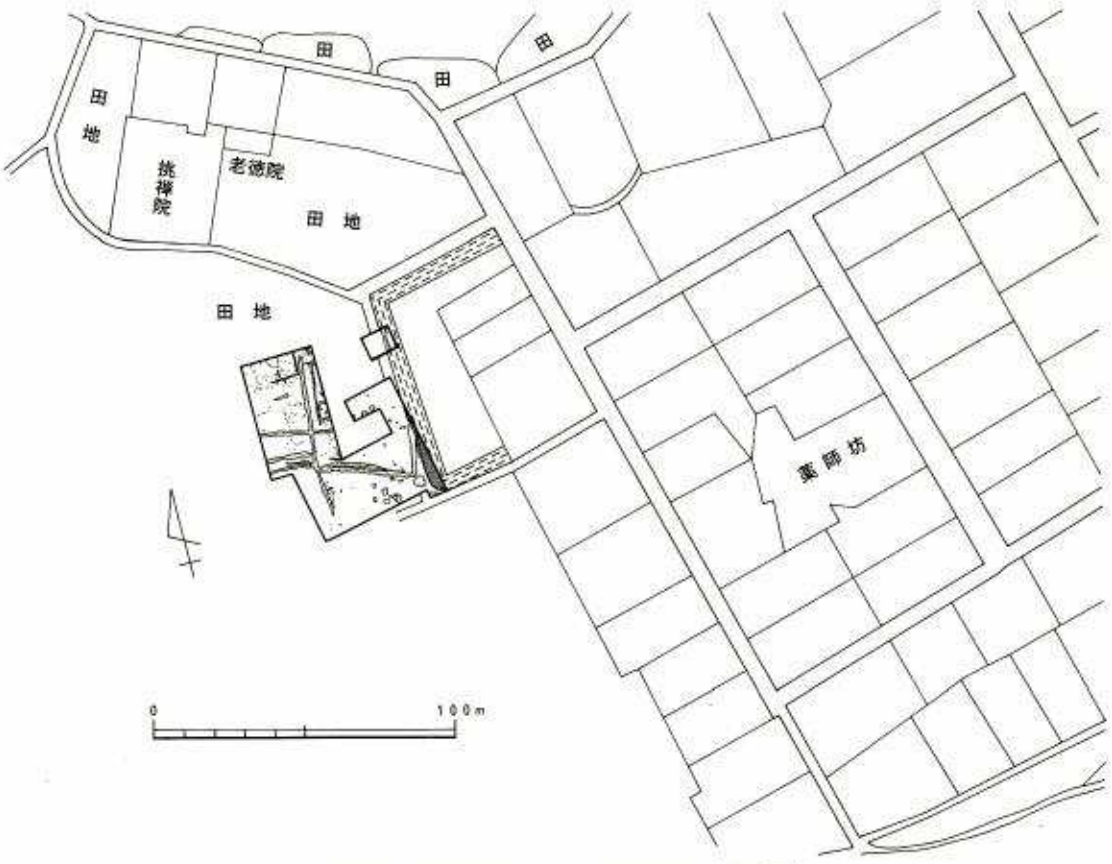
次にＳＤ13は、東半部が調査区外に出ているために、全体の規模は不明であるが、その深さ、想定される幅から考えても、他の溝とは、性格に顕著な違いがあると考えられる。また他の溝が13世紀代を中心とする時期にほぼ同時に存在したと考えられるのに対して、ＳＤ13は、ＳＤ８と切り合っており、その切り合い関係から確実に新しいことがわかる。

屋敷町周辺については、いくつかの絵図が残っている。三田藩屋敷図『摂州三田図絵』[2]（寛文初年1688年代）では、調査地は、コの字の堀と、田地が描かれている。この事からＳＤ13は、三田藩屋敷図『摂州三田図絵』に描かれている堀の一部と考えられる。この堀の所属年代であるが、今回の調査では、溝の調査面積が狭く、最下層まで完掘していないために、遺物は検出されなかった。しかし、従前の三田市教育委員会が実施した調査では、この堀と一連のものと考えられる堀が見つかっており、その出土遺物から、埋没時期の上限は1630年代前半と考えられている。[3]

また、今回の調査で近世の遺構・遺物が少ないことは、近世には田地であったという絵図の記載を裏付ける結果となった。

最後に今回の調査で判明したことを箇条書きする。

1．今回の屋敷町遺跡の調査では近世の遺構は少なく、その多くは、13世紀代の柱穴群・溝であり、集落の一部と考えられる。



第18図『三田図絵』とＳＤ13関係図（模式図）

2．調査区北西側では、集落の縁辺部が確認されており、その北側と西側に集落が続く可能性がある。

3．南側では、集落を構成する遺構群は稀薄にしか検出されていない。

4．調査区の東側では堀が検出されている。これは、『摂州三田図絵』に描かれている堀と考えられ、その所属時期は、ＳＤ８よりは後出するもので、13世紀以降に築造され、17世紀前半には機能を停止していた周辺の堀と一連のものである可能性が高い。

（註）

1．新竹由美　1995　「中世の土坑群」『屋敷町遺跡』三田市教育委員会

1．高田義久　1990　『三田絵図と家中録』三田市教育委員会

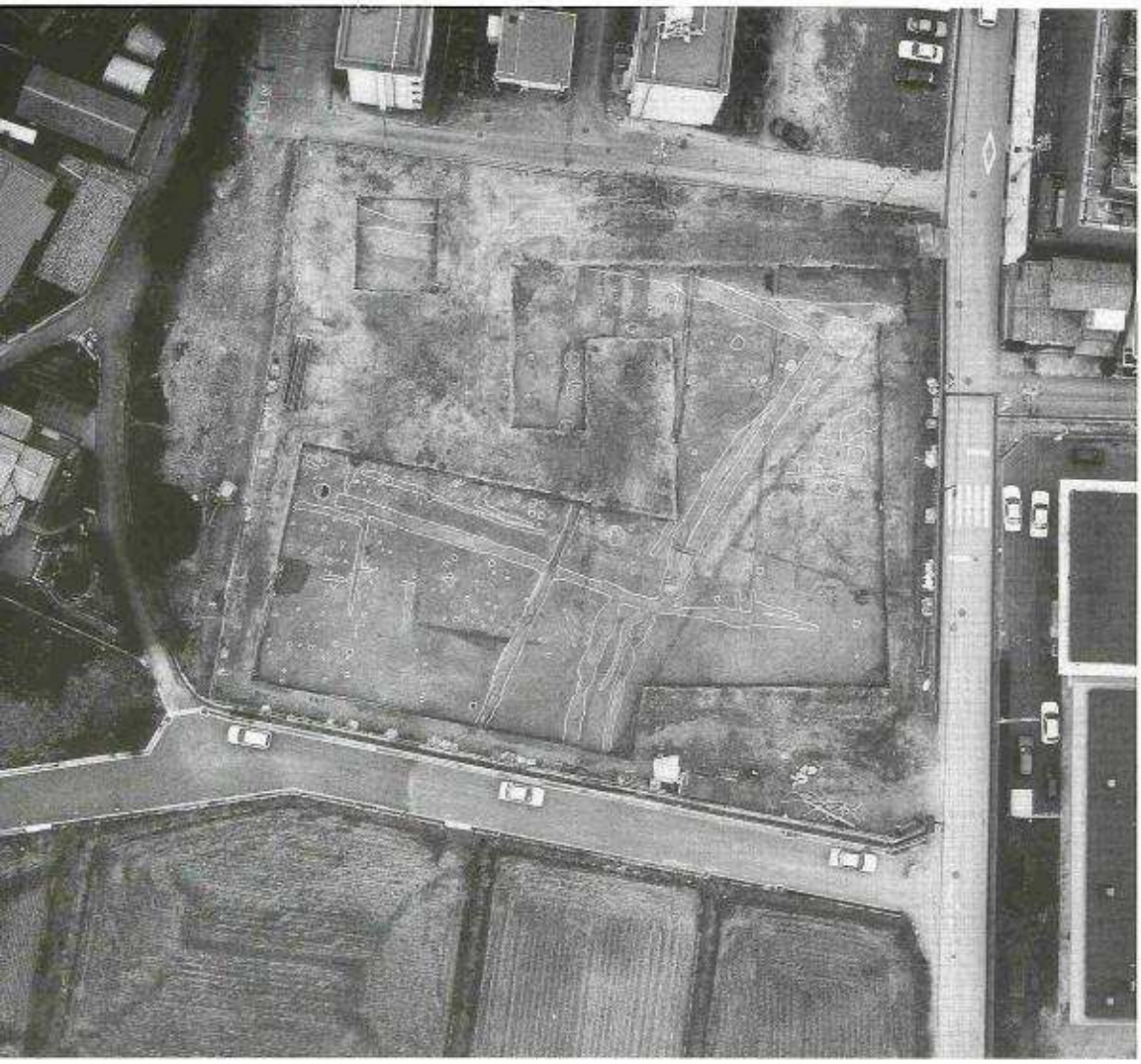
2．山崎敏昭　1995　「中世末の掘状遺構」『屋敷町遺跡』三田市教育委員会

写　真　図　版

南からの調査地遠景
（空中写真）

北からの調査地遠景
（空中写真）

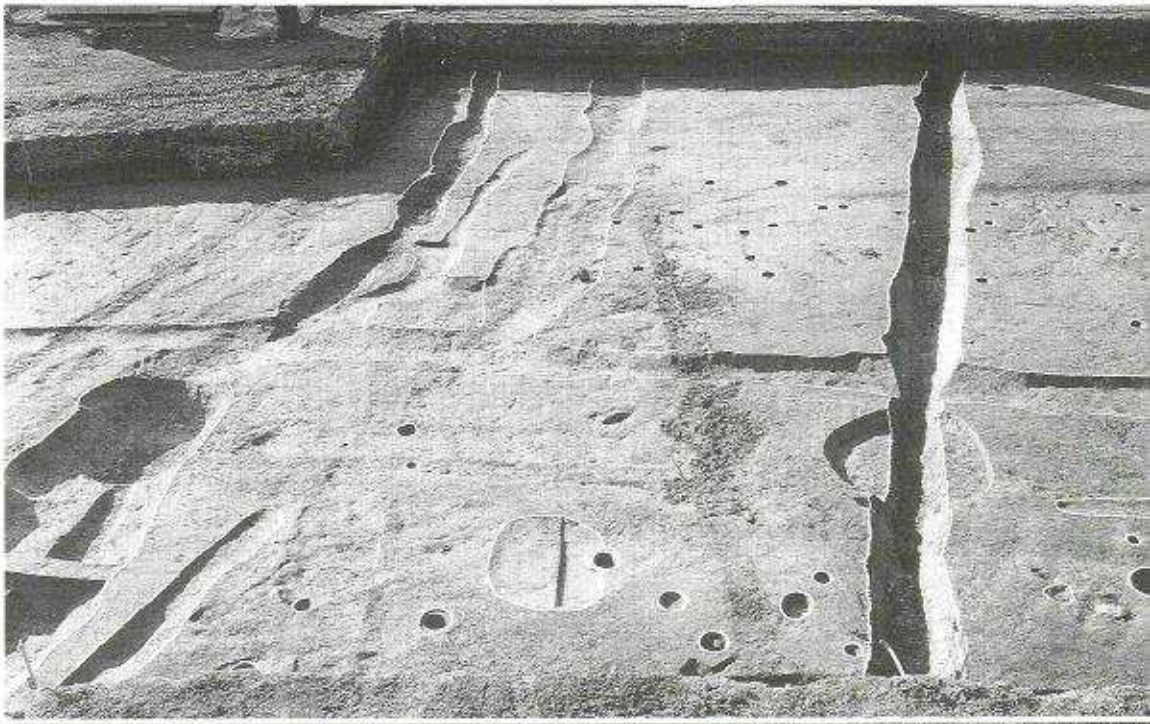
図版 2



西からの調査地全景

南からの調査地全景

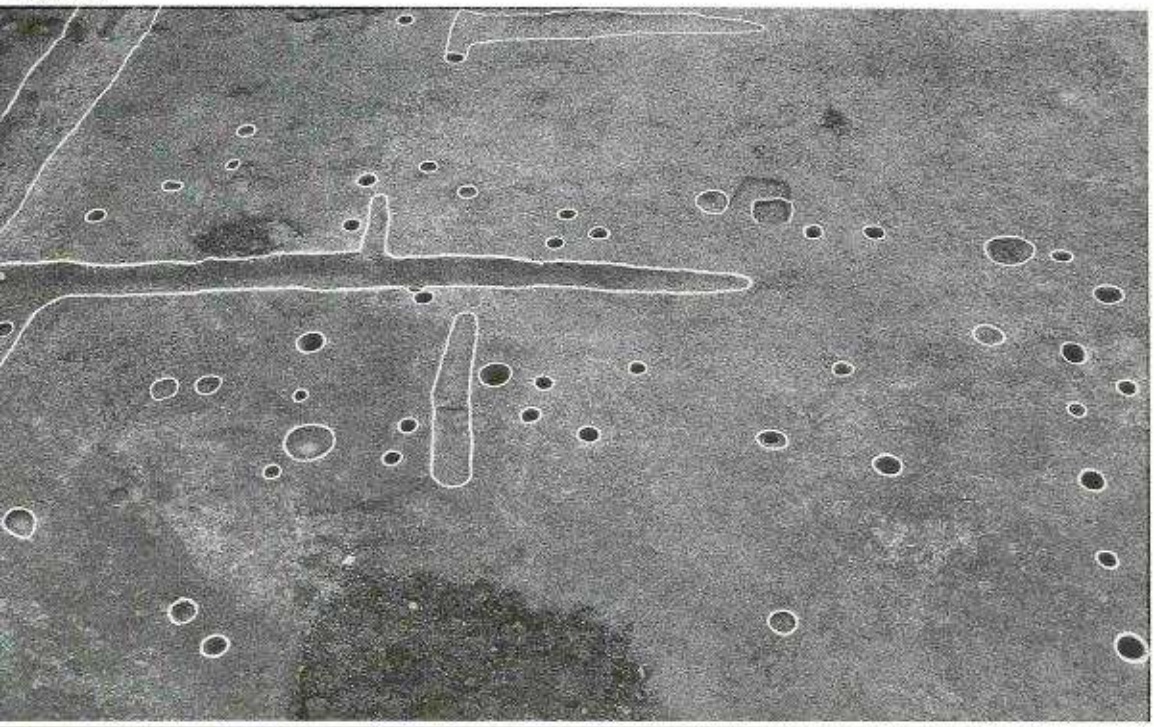
A地区全景（北から）



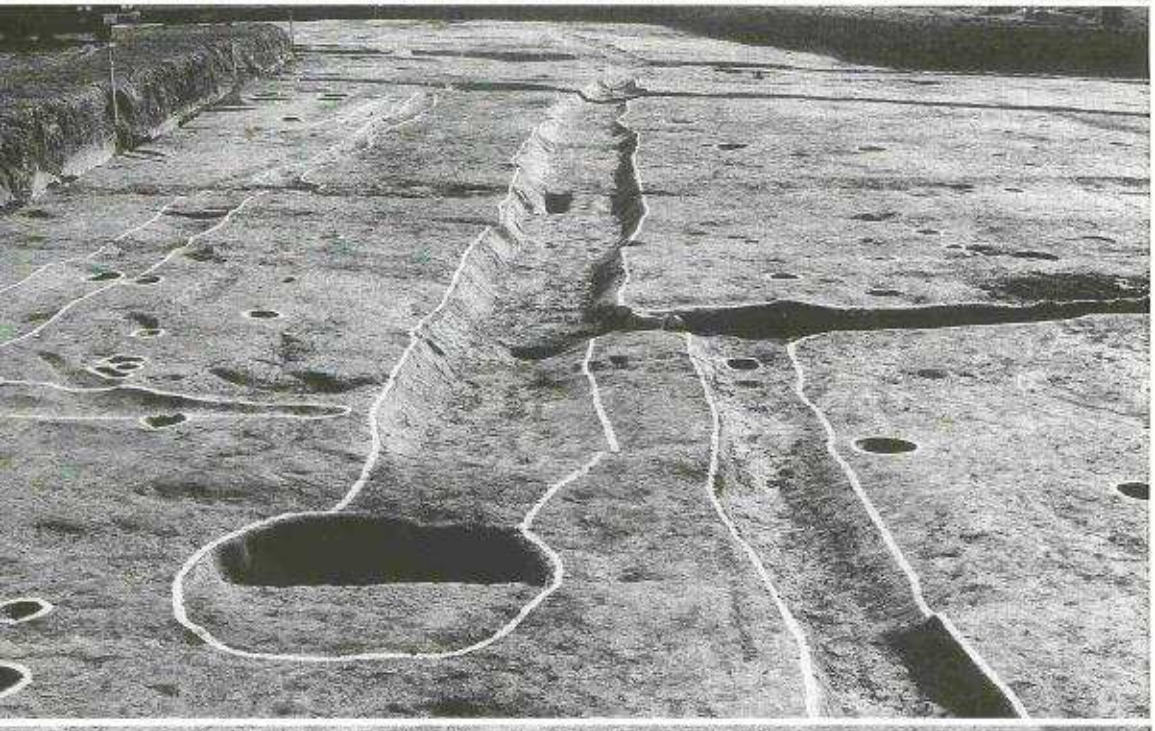
A地区南側（東から）

A地区全景（南から）

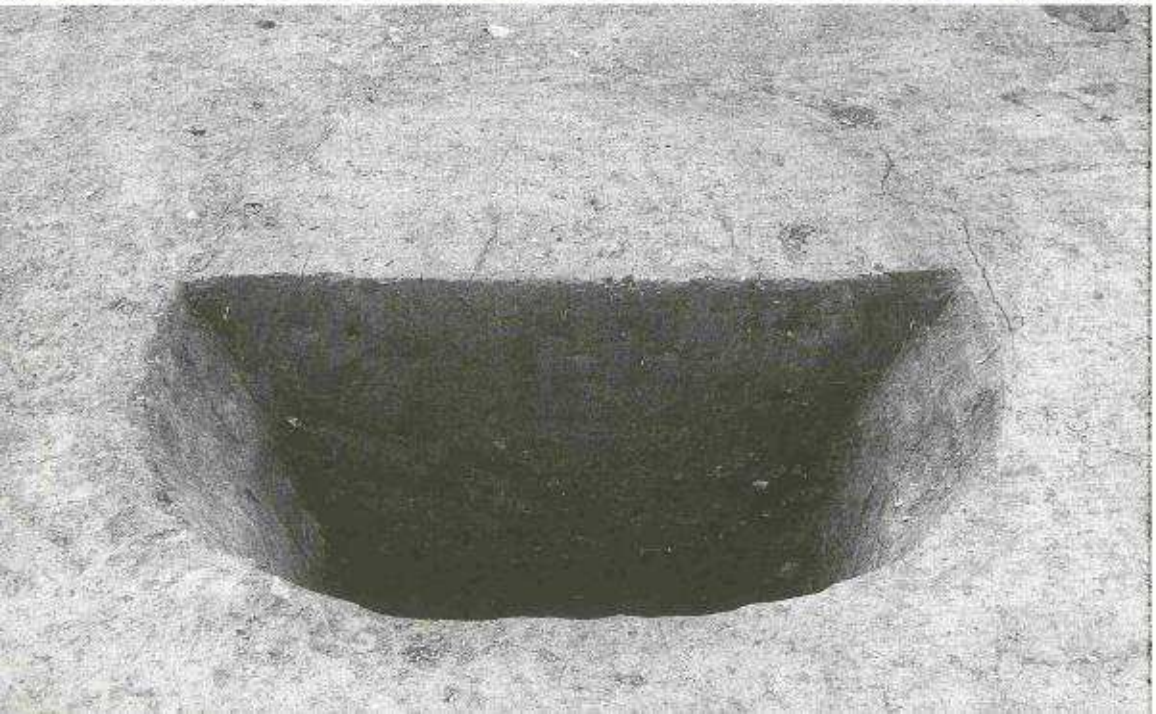
図版 4



A地区柱穴群（北から）

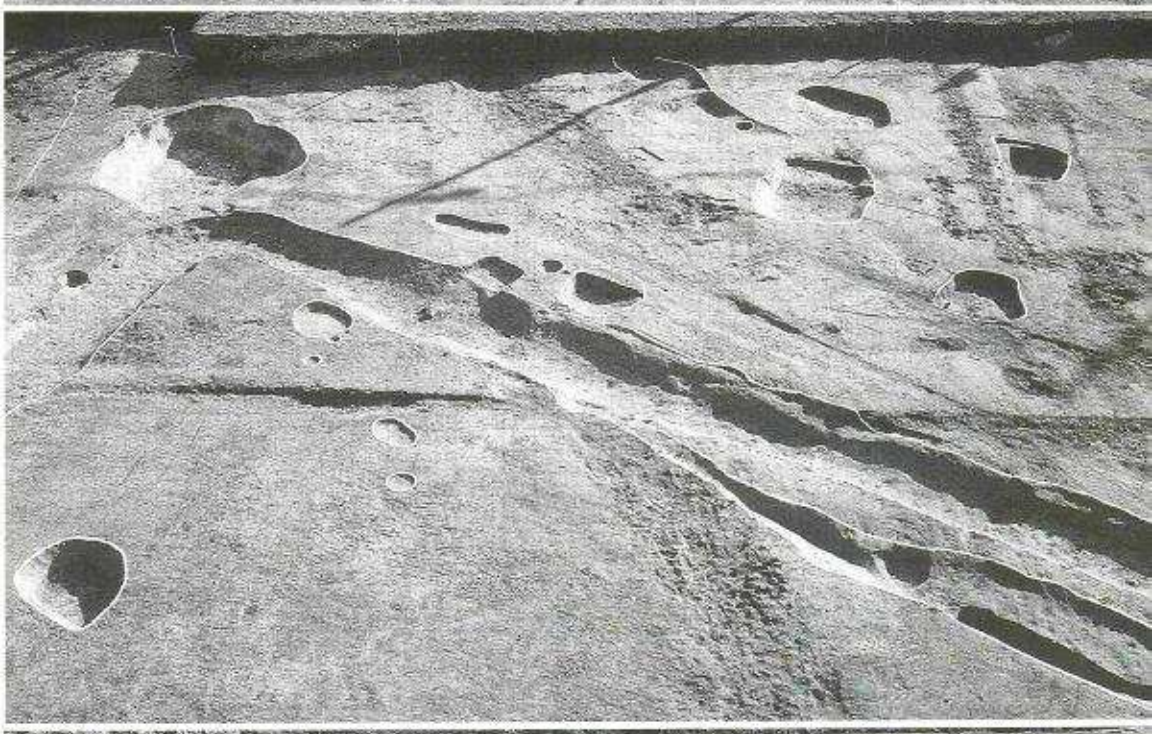


A地区ＳＥ１とＳＤ１
（北から）



A地区ＳＥ１断面
（南から）

B地区西側（西から）

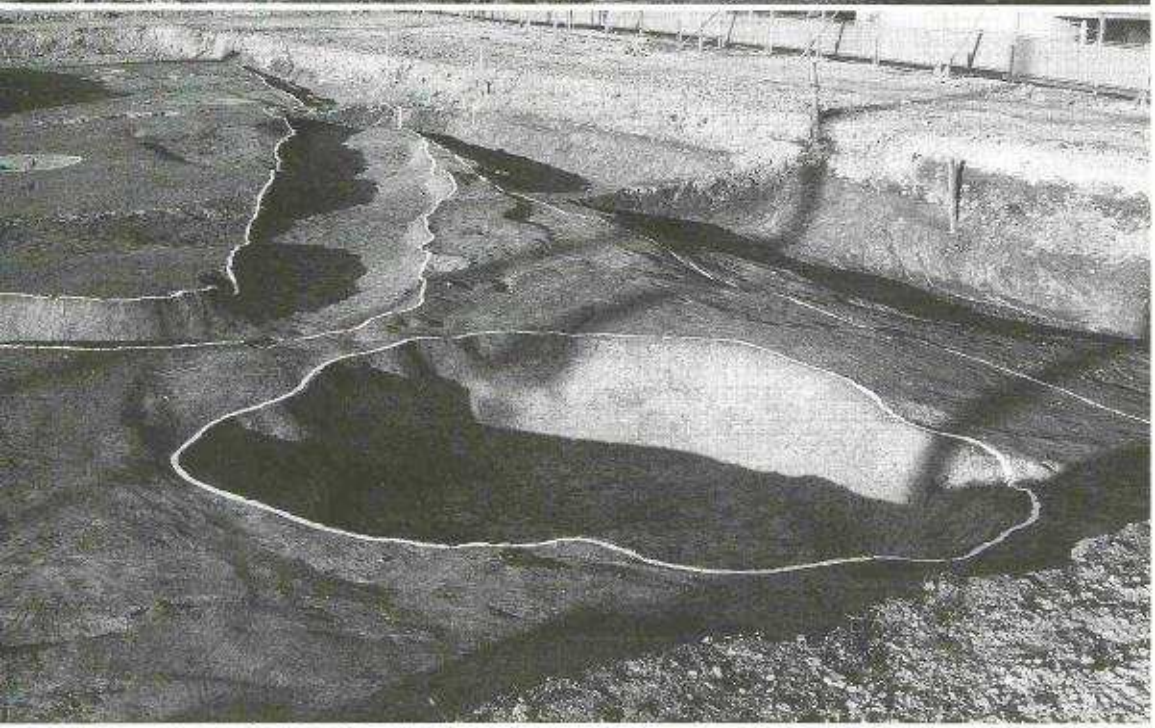


B地区東側（北から）

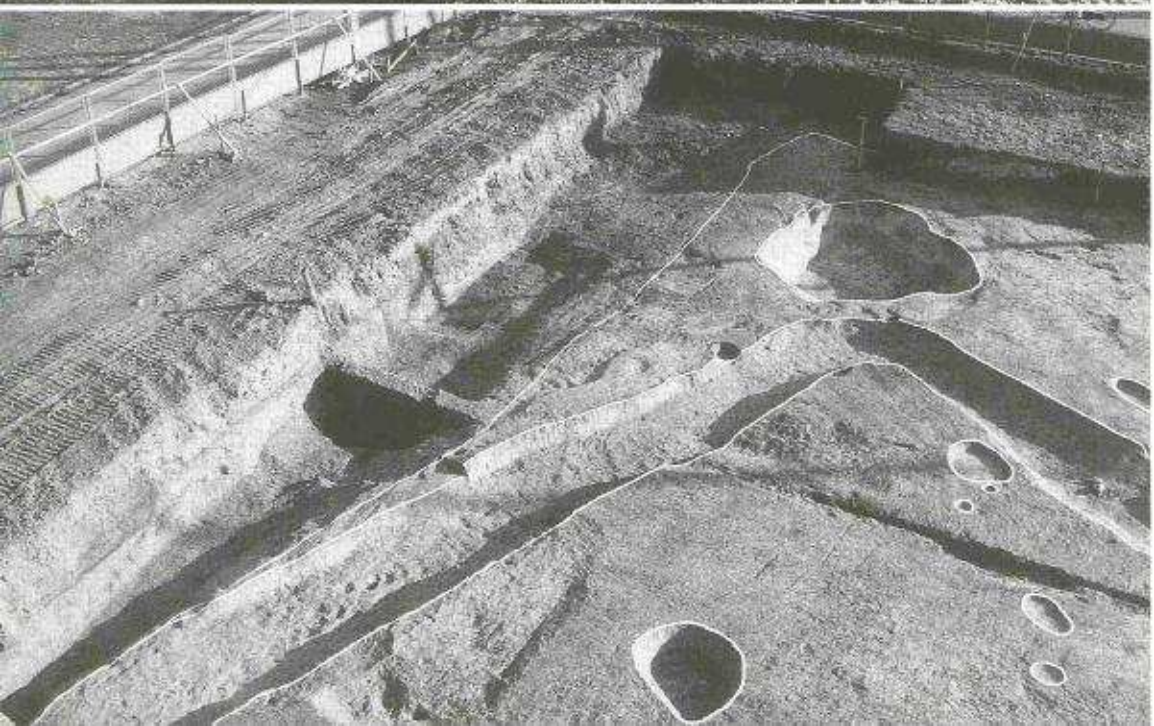
B地区SD 8・9
（西から）

図版 6

B地区土壙群（南から）

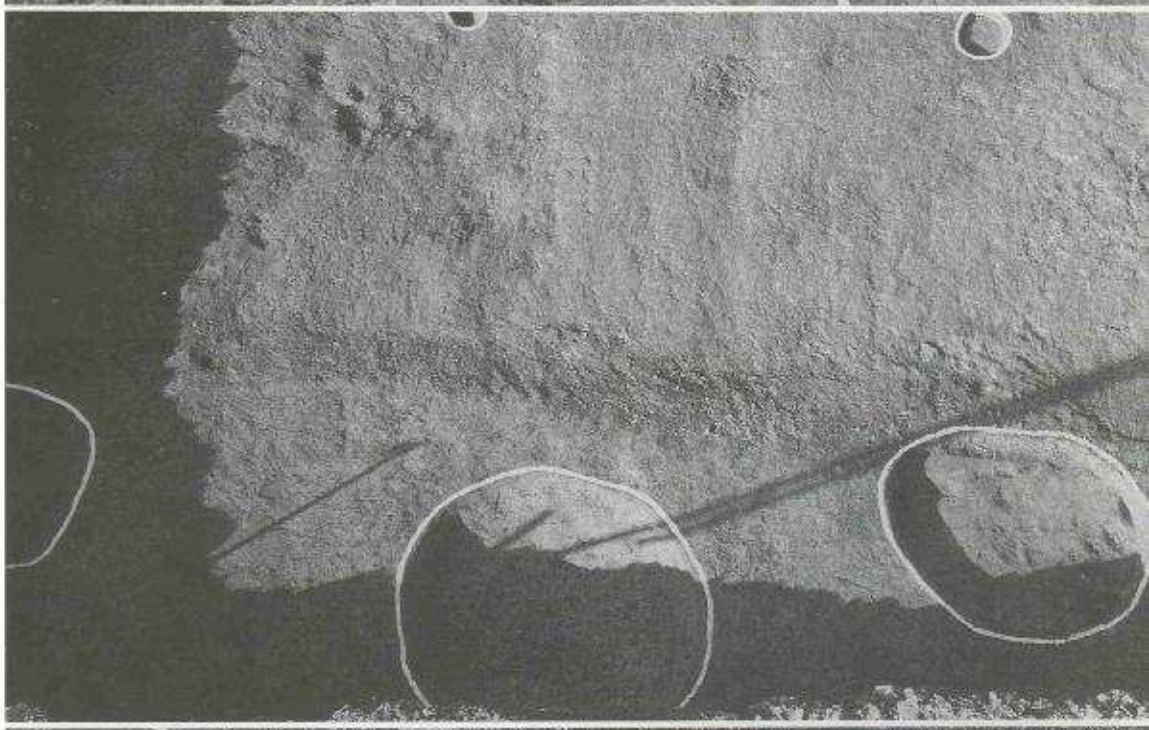


B地区ＳＫ９（南から）

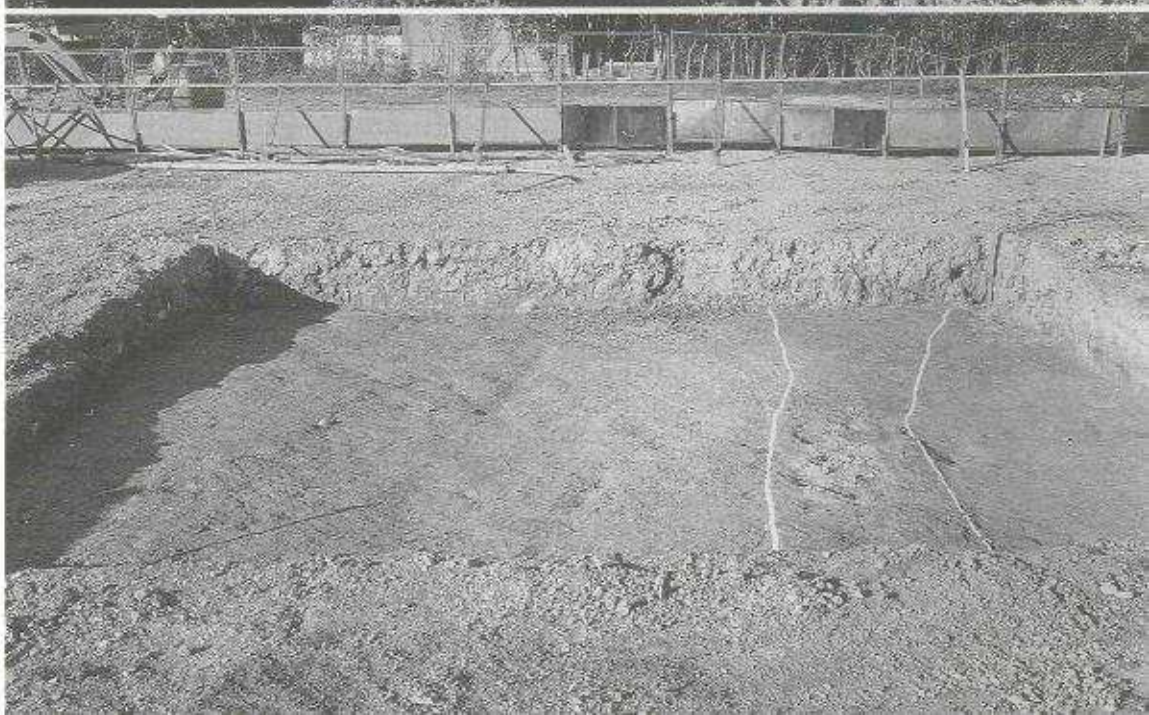


B地区ＳＤ８・13
（北西から）

B地区ＳＤ８・13
（北から）

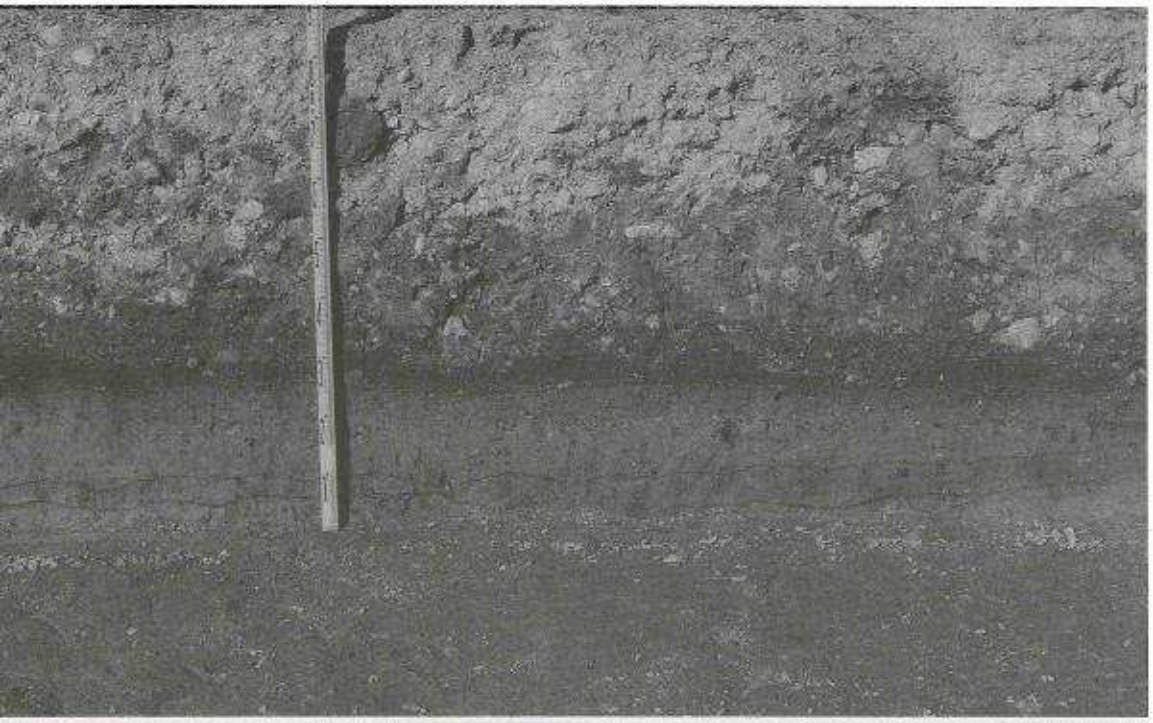


C地区土壙群（南から）

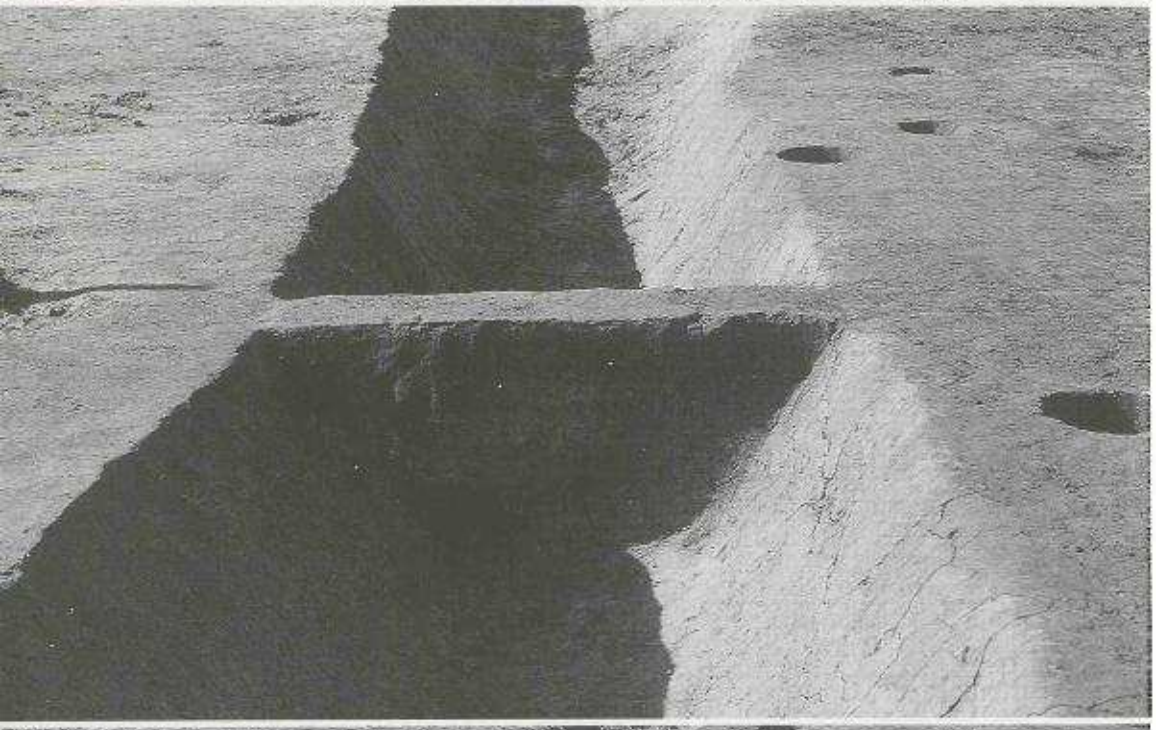


D地区全景（南から）

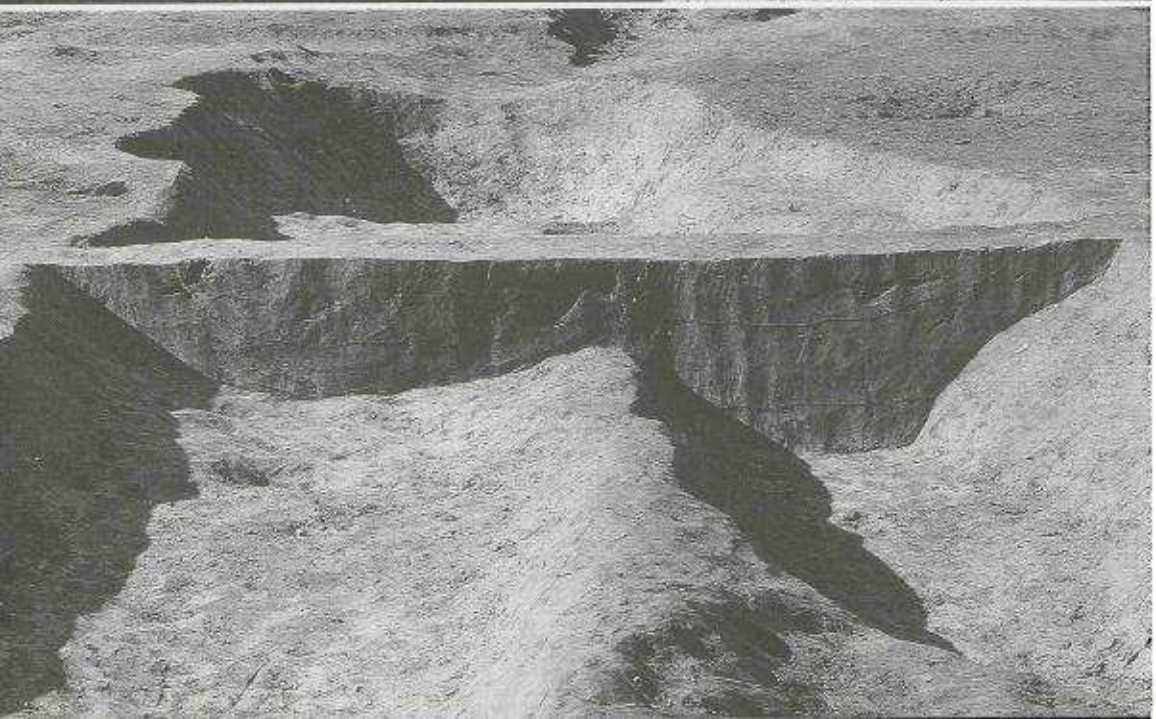
図版 8



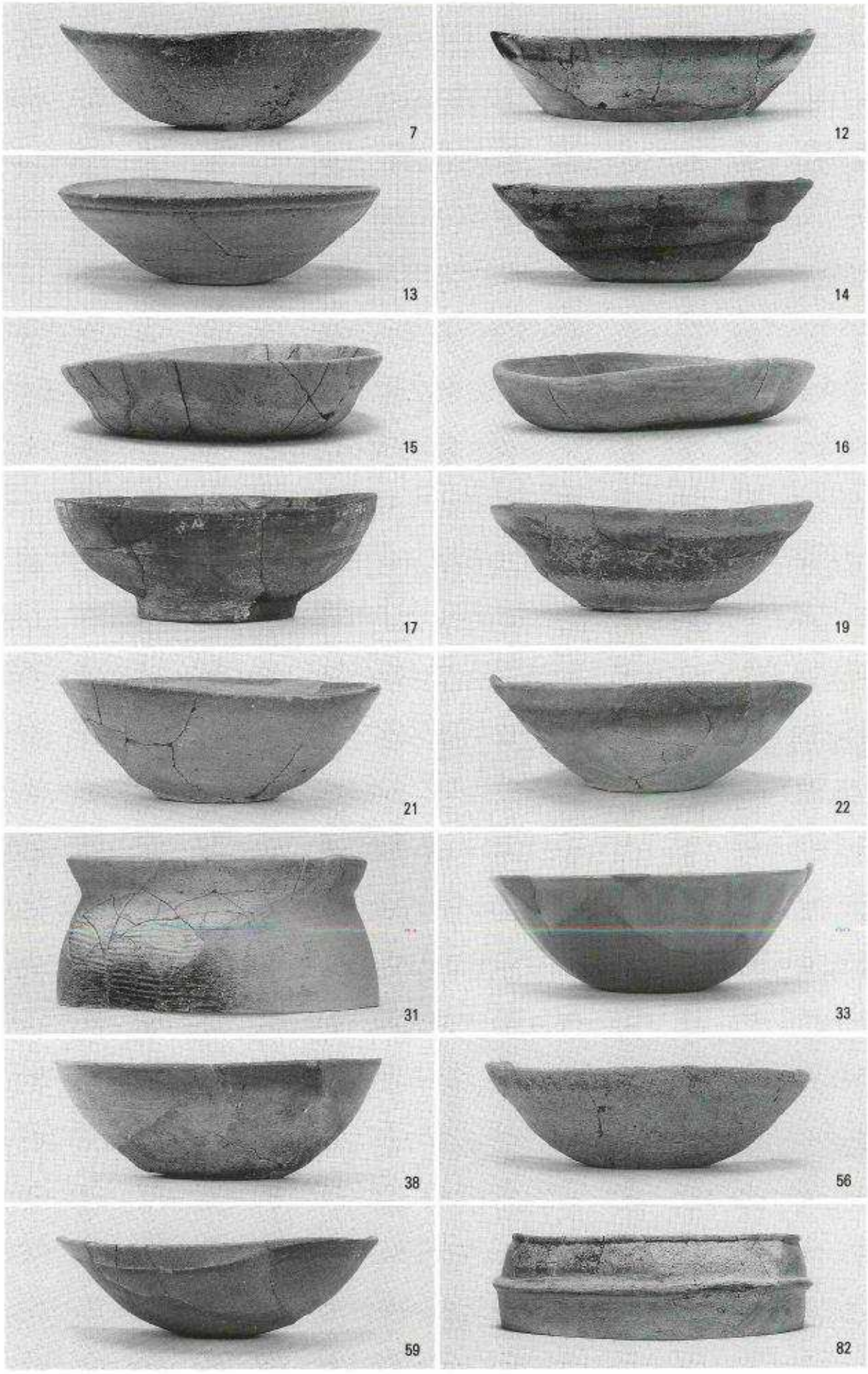
A地区北側土層断面
（南から）



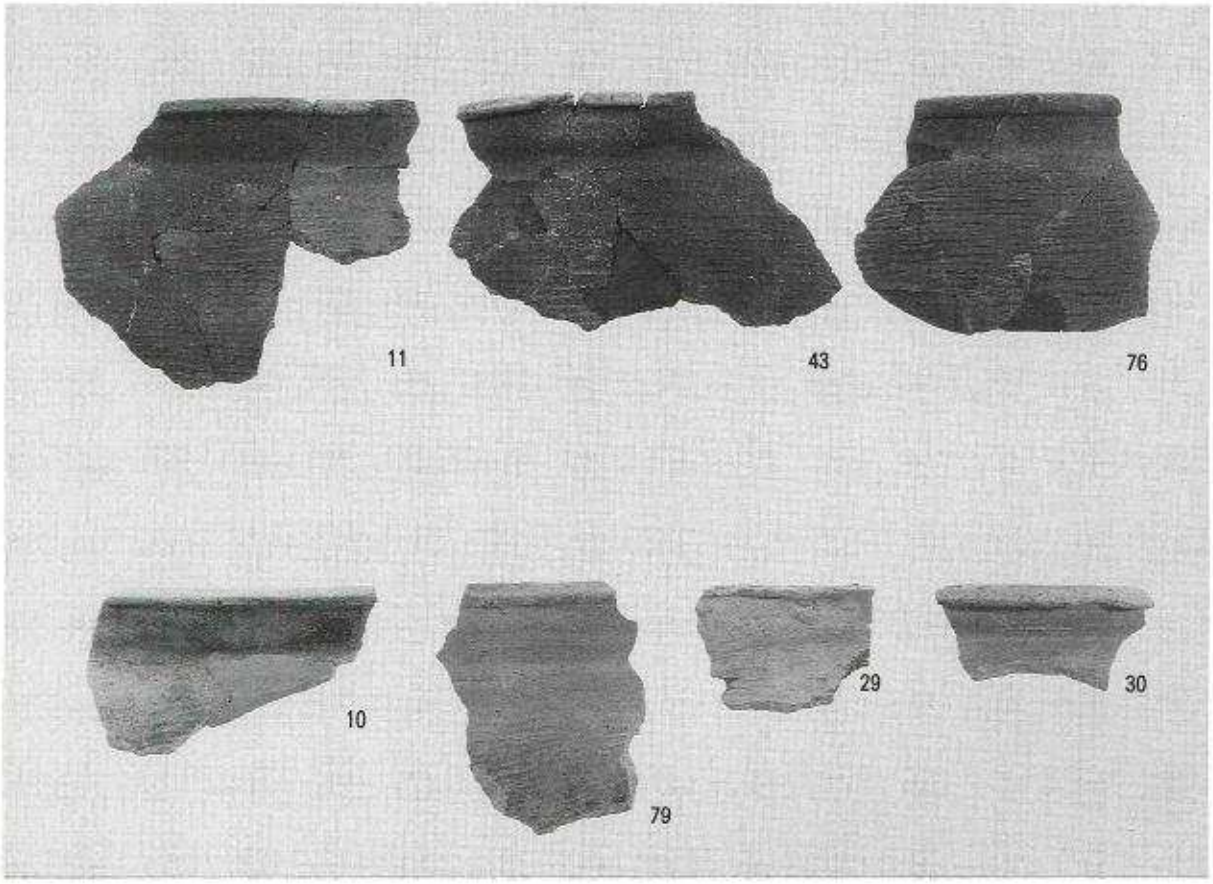
A地区ＳＤ５土層断面
（東から）

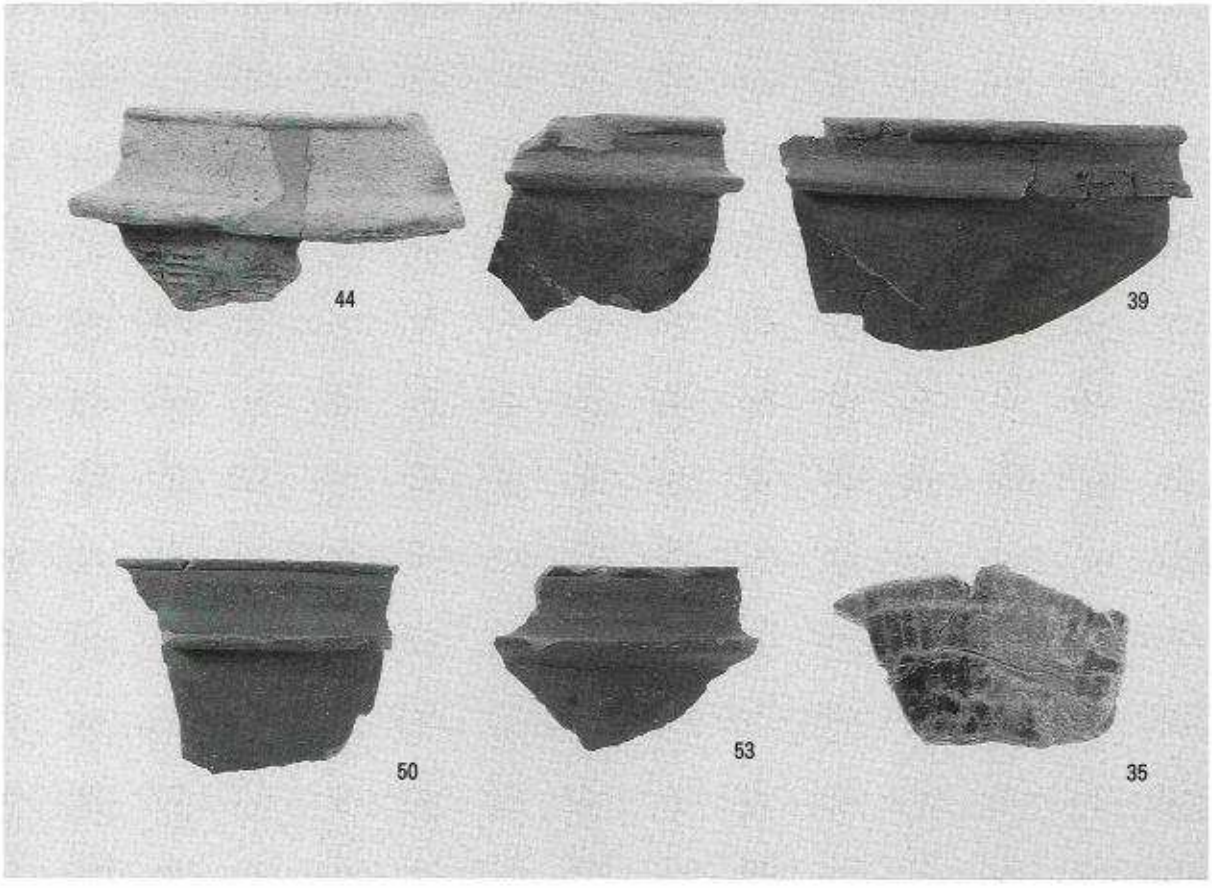


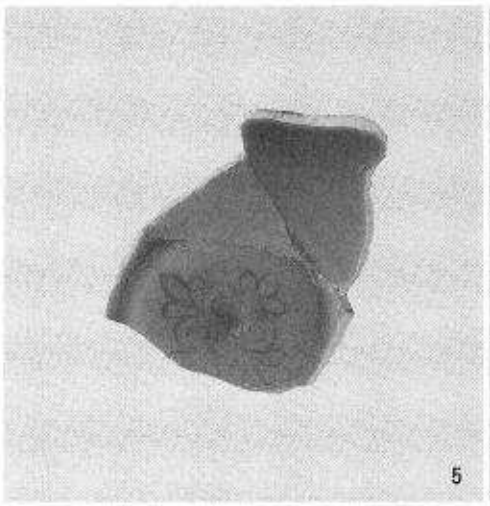
B地区ＳＤ８・９土層断面
（東から）

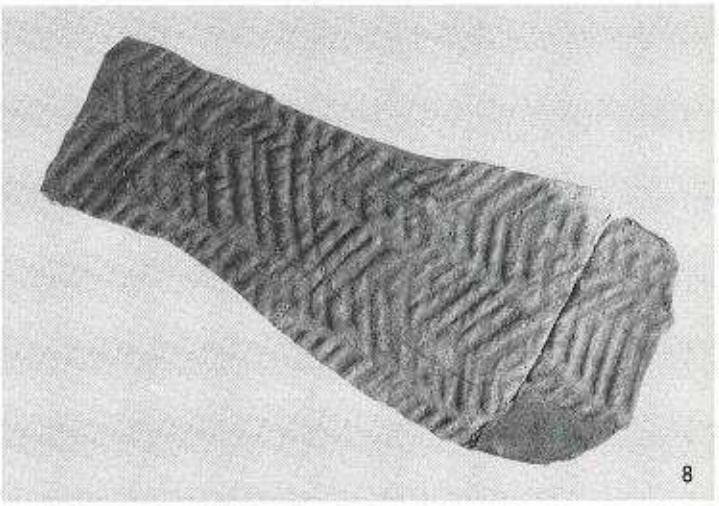

7
12
13
14
15
16
17
19
21
22
31
33
38
56
59
82

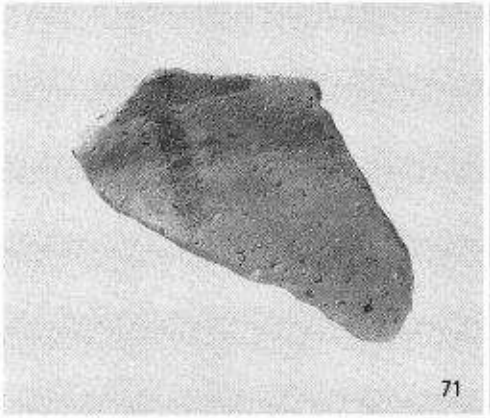
図版10



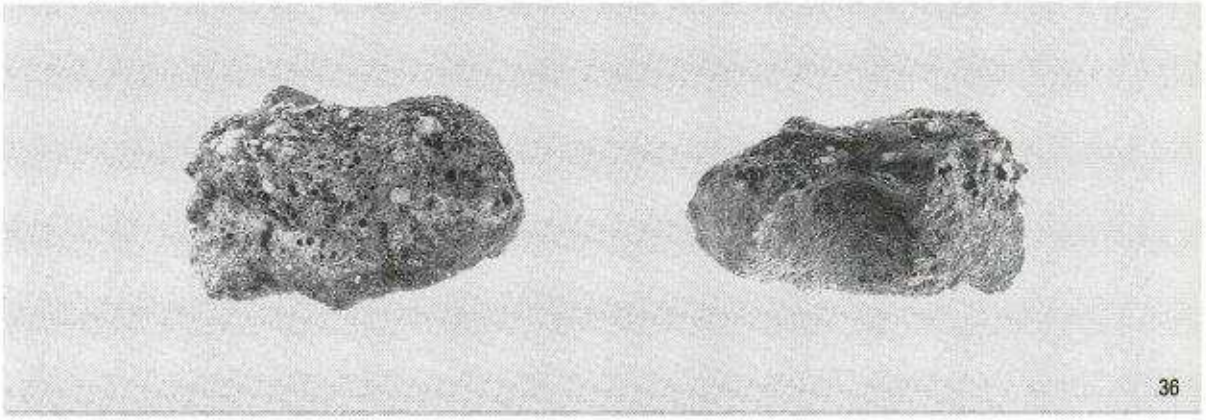


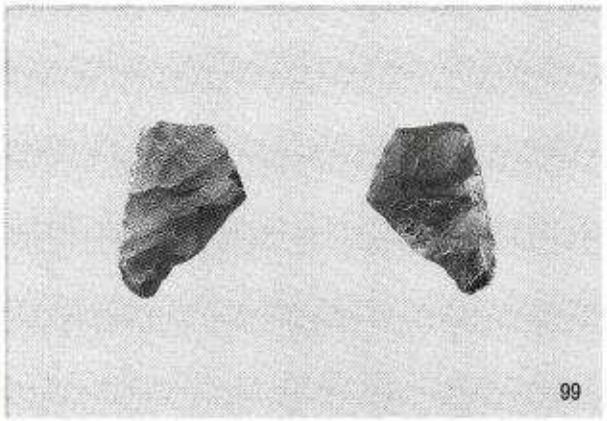

5

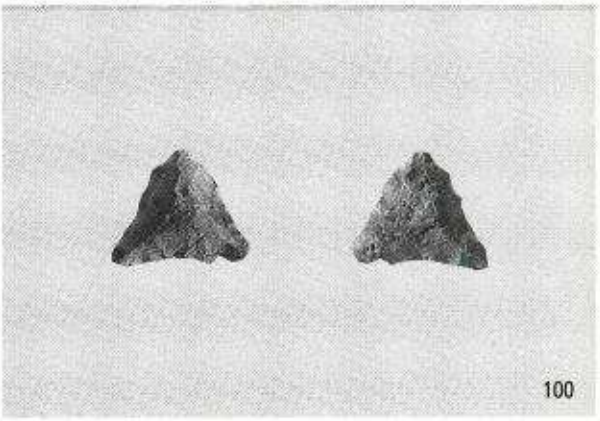

8


71

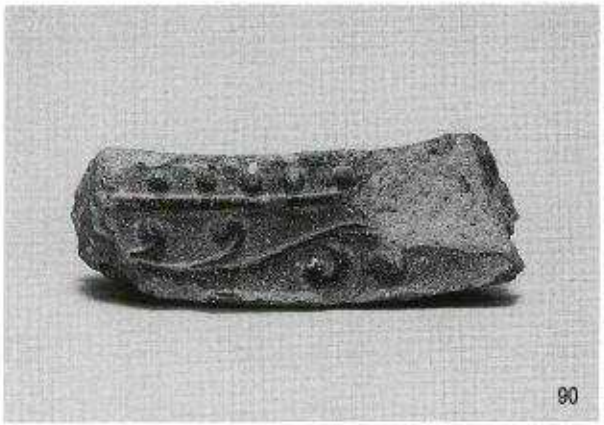
88 89

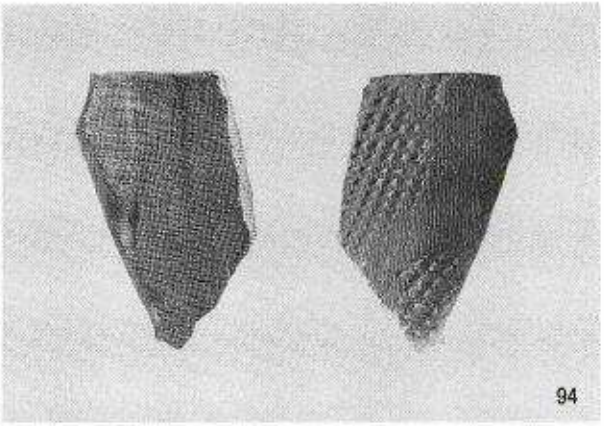

36

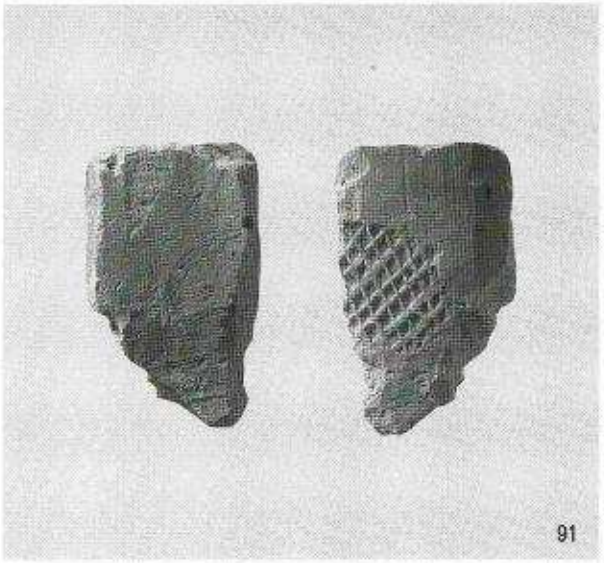

99

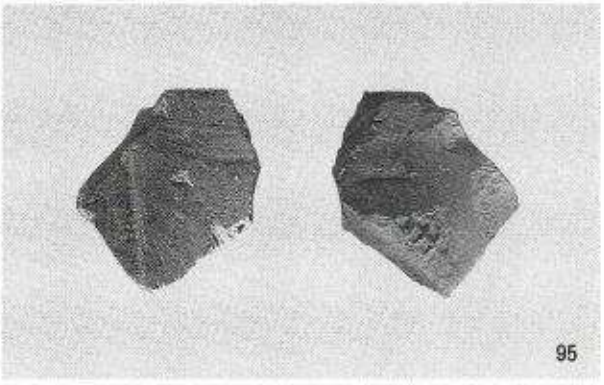

100

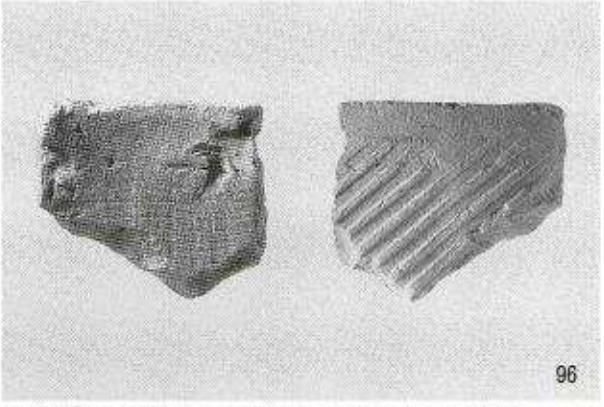
図版12

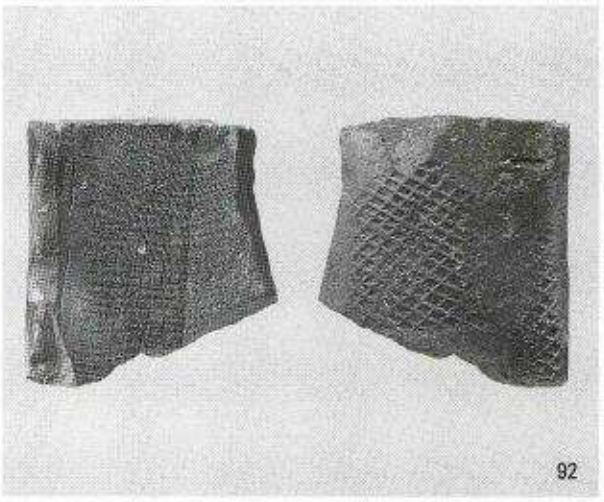

90

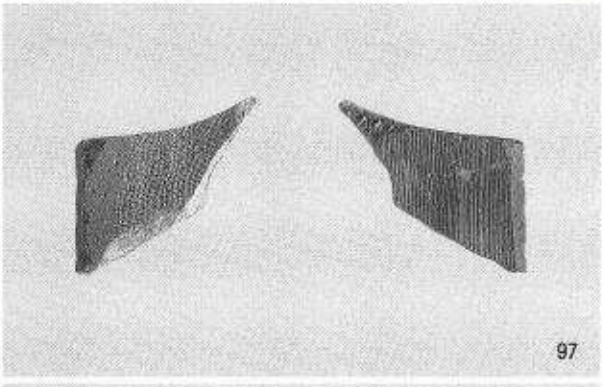

94

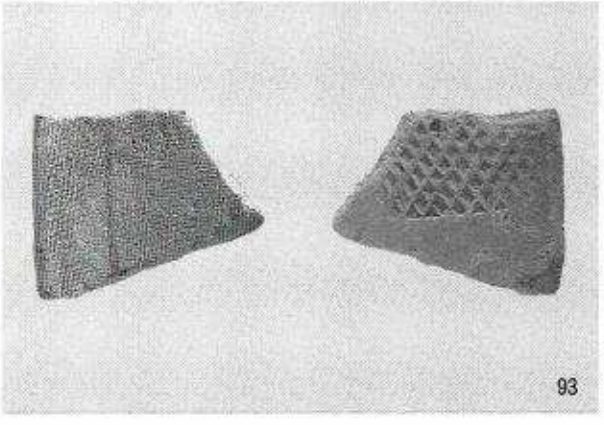

91

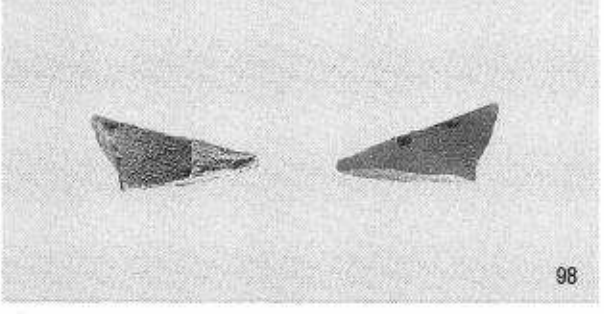

95


96


92


97


93


98

報告書抄録

ふりがな	やしきまちいせき
書名	屋敷町遺跡
副書名	県営三田大池団地改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第189冊
編著者名	松岡千寿・三辻利一
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL078-531-7011
発行年月日	西暦1999（平成11）年 3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
やしきまち 屋敷町 いせき 遺跡	ひょうごけん さんだし 兵庫県三田市 やしきまち 屋敷町 字大池ノ南 588番地他	28219	940222 940270	34° 52′ 54″	135° 13′ 24″	941114 ～ 950206	1992㎡	県営三田大池団地改修に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
屋敷町遺跡	集落	鎌倉時代	溝・柱穴群	土師器 須恵器 瓦器 中国陶磁器	中世の集落

兵庫県文化財調査報告　第189冊

屋敷町遺跡

－ 県営三田大池団地改修に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 －

平成11年３月31日発行

編　集　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号

ＴＥＬ　078－531－7011

発　行　　兵　庫　県　教　育　委　員　会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　　株式会社　精　文　舎